オーヴァー・アイル　The　Ｒｏｓｉｒｅ

としくん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オーヴァー・アイル　Ｔｈｅ　Ｒｏｓｉｒｅ

【Ｎコード】
Ｎ３６０２Ｄ

【作者名】
としくん

【あらすじ】
かつて、オーバーアイルという空に浮かぶ大陸群が存在した。そこに住む者は天空人と呼ばれ、地上に住む者は地上人と呼ばれた。ある時、天空人は空から地上を支配しようとしたが、地上人にそれを阻まれた。そして、戦争が起こった。灼熱の炎が大地と空を焼きつくし、多くの大陸が地上に沈んでいった…後に紅蓮戦争と呼ばれるそれは、ある一人の少女が引き起こしたと言う…その少女の名は…ラカン…

第一章　空から現れし男

スカイ・バスの発着場からけたたましい音が響きだした。同時にホーム内にアナウンスが流れる。

「三時十二分発、エイブラ行き十三便が発車致します。お乗りのお客様はホームまでおこしください。」

アナウンスに促され、ホームに人が集まりだした。ゲートが開くと一斉に乗り込み始めた。その中で、一人の青年と初老の老人が握手を交わしている。

「お世話になりました。カラノ先生。」

「あぁ、三年なんて早いものだな。あっという間だったよ。あの幼い少年が、今はオーバーアイル最高の考古学者になったんだからな。」

「父も、驚いていると思います。」

カラノは青年の顔を見た。

「父上によろしくな。次は学会で会おう。ルフォール。」

「はい。」

ホームにベルが鳴り響いた。スカイ・バスの発進が間近になった合図だ。

「それでは。先生、お元気で。」

そう言うと、ルフォールはゲートの奥へと進んでいった。カラノは名残惜しそうに彼の背中を見つめていた。

発車の時間になり、スカイ・バスはゆっくりとその翼を持ち上げた。この国には滑走路と言うものがない。いや、この大陸群全てがそうだ。なぜならば、全てが空と言われる海に漂う、浮遊大陸なのだ。地上人からは「オーバーアイル」と呼ばれている。かつては、この空を埋め尽くすほどの大陸群が存在した。だが、一千年前の紅蓮戦争で半分以上が地上に落ちたのである。

嘘か、誠か……その戦争の発端は一人の少女が原因だったと言う。少女の名前はラカン。かつてのオーバーアイルが生み出した究極の殺戮兵器と伝えられている。だが、そう伝えられているだけで、確証を得るようなものは何もなかった。過去の記述が少なすぎるのだ。なぜ彼女が必要だったのか……彼女は本当に存在したのか……疑問が疑問を生み出すが、その証拠は紅蓮戦争で燃え尽きてしまった。しかし、オーバーアイルの考古学者たちはあきらめられなかった。古代のロマンとは言いすぎかもしれないが、皆の目的はやはりラカンなのだ。彼女の存在を確かめることが彼らの目的でもあり、夢でもある。

ルフォールもその一人だ。若干二十歳でオーバーアイルの考古学博士号を取ったあと、ラカン伝説の解明に一人挑み、過去の仮説を総なめに覆していった。いわば、天才児だ。そして、オーバーアイル最大の国家、「エイブラ」の第二王位継承者でもある。隣国「ギアラ」での留学が終わったので、次の学会に備えての準備も兼ねて、久々の里帰りをすることにしたのだ。ルフォールは窓際の席に座り、次の学会での論文に目を通していた。

「やっぱり確かな証拠がないと難しいな。」

ふと、窓の景色を見た。雲海がとても美しい。思えばこの三年間、ずっと勉強ばかりで、こんな風に落ち着いた事がなかった。

「カラノ先生が見たら、怒るだろうなぁ。もっと腰をいれて勉強しないか！　って。そういえば、父上は手紙こそくれたけど、一度も会いには来てくれなかったなぁ。本当に親友なんだろうか……」

彼のホームステイ先はカラノの自宅だった。何でもルフォールの父、エルシス十六世とは学生時代からの親友らしい。ルフォールが考古学を勉強したいと懇願したところ、彼のところでなら……ということでお許しが出たのである。

「ま、いいか。こうして勉強させてもらったんだし。おかげで博士号も取れたし。」

いつしか、ルフォールの顔は穏やかに微笑んでいた。

「父上、兄上……三年ぶりですねぇ。」
ルフォールは、もう一度論文に目を通し始めた。

スカイ・バスの運行は順調だった。ギアラを出発して、一時間。あと一時間半ほどでエイブラに到着する。何事もない航海、それが一番だ。だが……
「機長、計器の調子が悪いんですが……」
操縦士が計器の以上に気付いた。
「どうした？」
「分かりません、気圧計と高度計の針が……」
言った途端、二つの針が０を示した。
「止まりました。」
「……どういうことだ？」
「機長！前を見てください！」
言われて機長は顔を上げた。進路の先で何かが光っている。おかしい、雷だろうか？だが、雷ならあんな塊にはならない。光はすこしづつ形を変え、やがて実態を現した。
人間だ……
「馬鹿な！人だと！」
機長は操縦桿を握った。このまま進めば、ぶつかってしまう。なぜ、あんなところに人間がいるのか分からないが、衝突は避けねばならない。機長は操縦桿をひねった。だが、ピクリとも動かない。
「っく！動け！」
もてる限りの力で操縦桿をひねるが、それでも動かない。
空にうかぶ人影はゆっくりと手を上げた。そして、その手をゆっくり振り下げた。瞬間、スカイ・バスは真っ二つに引き裂かれた！乗客が次々と空に放り出される。引き裂かれた機体は所々爆発を起こしながら地上の海に落ちていった。それを見届けると、その人影は高笑いをあげ、ゆっくりとその場から消えていった。
「見つけたぞ、ラカン……」

そういい残して……

第二章　黒い天井

ルフォールは草原の中に立っていた。周りが金色に輝いている。ここはどこだろう……城の近くの丘だろうか……

どこか見たことがあるような景色だった。彼の視線の先に人影が写る。それは見た感じは女性のようだった。何かしゃべっているようだ。

「ルフォール、ルフォール！」

聞き覚えのある声だった。ずっと昔に消えてしまった懐かしい響き……

ルフォールはすぐに思い出した。

「母上……！」

彼が気付いたのを察したかのように、女性は消え去っていった。いつの間にかルフォールは駆け出していた。気付けば、彼の姿は幼い頃にもどっている。そして、目からは大粒の涙がこぼれている。彼は必死に叫んだ。

「母上、行かないで！　母上！！」

そう叫ぶや否や、彼の周りが明るくなっていく。彼はあまりの眩しさに目を閉じた。

しばらくして目を開けると、黒くくすんだ天井が目に入った。

……ここはどこだろう……

ルフォールはゆっくりと体を起こした。激痛が体中を走る。どうやら命だけは助かったようだ。あたりを見回すと、とても殺風景な景色が広がっていた。彼が寝ているベッドに、部屋の隅に置かれた机、あとは棚らしき家具が置かれているぐらいで何もない。あたり一面天井と同じように黒くくすんでいる。明かりは灯っているが、それでも暗い。ルフォールがベッドから降りようとすると、ドアが静かに開いた。

「駄目よ、まだ動いちゃ。あなた全身打撲で絶対安静なんだから。」
そこには少女が立っていた。まだ十五、六歳だろうか。幼い顔立ちからは想像できないような大人びた口調だ。
「全身打撲…？」
「そうよ、あなた空から落ちてきた羽の生えた乗り物に乗ってたの。何も覚えていない？すごい事故だったんだから。」
言われてルフォールは思い出した。
スカイ・バスの事故……突然機体が真っ二つに割れたのだ。乗客が空に投げ出され、紙くずのように落ちていった。彼は座席に必死にしがみついていたが途中からの記憶がない。恐らく気を失ったのだろう。ルフォールは少女に質問した。
「あの……僕が乗っていたスカイ・バスは……ほかの乗客や乗組員はどうなったかは分からないのかい？」
少女は、机の上に花瓶を置くと、静かに口を開いた。
「……助かったのはあなただけよ。ほかの人は影も形もなかったわ。多分、みんな空に放り出されちゃったのね。機体はこの島の山に落ちてきたの。私が行った時は、もうばらばらになっていた……あなたが助かったのは奇跡としか言いようがないわね。放り出された時に落ちたところが砂だったから良かったのかな。クッションの代わりをしてくれたのかもね。」
「あ……僕だけなのか……どうして……どうして僕だけ助かったんだろう……」
「さぁ……神様がまだ来るなって言ったんじゃない？」
うなだれるルフォールに向かって、少女は優しく微笑んだ。
「せっかく助かった命なんだから。大事にしなきゃね。ゆっくりと休んだらいいわ。まだ体は痛いと思うから。」
彼女の言う通りだった。ベッドに座っているだけなのに体は悲鳴を上げている。彼女は、さて……と言って部屋を出ようとした。
「あの……まだ名乗ってなかったね。僕の名前はルフォール。助けてくれてありがとう……」

「お礼もまだだったわよ、ルフォール。私の名前はラカン。よろしくね。」

彼女は、着替えを取ってくるから、と言って部屋を後にした。ルフォールは、自分を助けてくれた少女が、自分が研究している古代に存在した女性の名前と一緒という事に驚きを隠せなかった。

第三章　孤島の少女

ラカンが夕食（おそらく時間的にだが……）を持ってきてくれる頃には、二人はある程度和んでいた。どうやらこの島に住んでいるのは彼女と彼女が飼っている犬だけで、他には誰もいないという。

この島は地上のどの大陸からも離れていて、船も一切近づかない孤島なのだそうだ。そんな島に、彼女はずいぶん昔から暮らしているらしい。

「昔って……小さい頃から？」

ラカンは笑いながら答えた。

「いいえ、あなたがまだ生まれていない頃からよ。もう大昔ね。」

それを聞いたルフォールは思わず吹き出してしまった。

「ぷっ、あははは！　ラカン、嘘はダメだよ！　だって、どう見たって君は僕より年下にしか見えない。ずっと大昔から生きていたなんて……信じられないよ。」

すると、ラカンは彼をじっと見つめた。その目はとても鋭く、ルフォールは心の中を見透かされたように感じた。

ラカンは言った。

「ルフォール……信じる、信じないはあなたの勝手よ。確かに、私みたいな女の子があなたが生まれる前から生きているっていうのはおかしいわ。嘘かもしれない。でも、これが事実なの。真実なの。だって、確かに私は存在しているんだから。」

そこまで言って、彼女は口を閉ざしうつむいた。ルフォールは思った。彼女は、今まで自分の存在をどう認識していたのだろうか。もし、仮に紅蓮戦争を引き起こした要因が彼女ならば、彼女の苦悩や苦しみはどれだけのものなのか……彼女がもし千年も生きてきたとしたら、どれだけの罪の意識にさいなまれてきたのだろう……それを考えると、ルフォールは急に彼女に対して切ない気持ちでいっぱいになった。同時に、彼女に対しての興味もわいてきてしまった。

ラカンは再び顔を上げると、静かに言った。
「ルフォール、これだけは忘れないで。どんな事でも、真実は一つだけしか存在しないの。たとえそれが偽りだったとしてもね。」
ルフォールは胸を貫かれる思いになった。彼女が言った事は、昔カラノ先生に言われた事とまったく同じだったのだ。
……歴史を深く知るにはどんな事でも真実を見抜く目が必要だ……
それが、カラノ先生のモットーだった。ルフォールもそれを学んだつもりだったが、まだまだ遠く及ばない。自分の目の前には大きな壁がいくつも立ちはだかっているようだ。
「ごめんよ、調子に乗りすぎたね。」
ルフォールが謝ると、ラカンはクスリと微笑んだ。
「気にしないで、いきなりそんな事言われたら誰だって信じられないわ。今はゆっくり体を休めるのが大事よ。怪我が治ったら、エイブラへ送ってあげる。」
ルフォールは飛び起きた。途端に体中に痛みが走るが、彼は歯を食いしばって耐えた。
「エイブラに……帰れるの？」
まだ苦痛に歪んだ顔をしているルフォールに向かって、ラカンは言った。
「帰れるわ、明日説明してあげる。」
ルフォールは安堵の顔を見せた。それを見たラカンは一瞬悲しそうな顔をしたが、彼に悟られぬよう、すぐにもとの表情に戻った。
「それじゃ、ゆっくり寝なさいね。おやすみ。」
「うん、おやすみ。」
ラカンを見送ったあと、再びベッドに横になったルフォールは、そのまま深い眠りに落ちていった。

第四章　過去の遺産

昨日の約束通り、ラカンはルフォールを連れて島内の施設を歩いていた。今日は彼女が飼っている犬も一緒だ。あまり人にはなつかないのか、普段は他の人と会うことがないためか……ルフォールが頭をなでようとすると、牙を剥いて威嚇してきた。

「な……仲良くしようね……」

彼は苦笑いでそう言った。

施設の通路も、部屋と同様に薄暗かった。灯りはともされているが、わずかに先を照らす程度。手元に灯りがなければ、正直歩きにくい。それでも、ラカンはどんどん前へ前へと進んでいく。こういう環境には慣れていないルフォールは、たまりかねて彼女にたずねた。

「あのさ…どこまで行くんだい？」

ラカンは何も答えずに前を指差した。その先には深い闇が広がっている。ルフォールはため息を漏らした。

「はぁぁ……ラカン……この廊下、もう少し明るくならないかな？こう暗がりだと、何も見えないから正直……」

そこまで言うとラカンが振り返った。

「怖いの？」

ルフォールは目をきょろきょろさせた。怖くないと言えば嘘だし、怖いと言えば情けないと思われるだろう。少々ながら、彼にも男としてのプライドがあるようだ。返答に悩んでいると、ラカンは犬を呼んだ。

「アルケード、調光装置を最大にしてきて。」

そう言うと犬は……いや、アルケードはワン！と一吼えし、闇の中へ走り出した。アルケードが見えなくなってしばらくすると、廊下にまばゆい光がともされた。今度は隅々まで良く分かる。廊下は天井と壁の境で丸くなっており、壁には継ぎ目が一切ない。床はエ

イブラの町並みや城のように石畳ではなく、金属のような艶のある物質でできていた。灯りも天井の真上から直にともされている。
「……すごい……」
ルフォールがラカンを見ると、彼女は「もう少し先よ」と言って歩き出した。彼も後を追うように足を進める。
彼女の後ろに付いてしばらく歩くと、廊下の先に大きな壁が現れた。その前には、アルケードがおすわりの姿勢で行儀良く待っている。
「おまたせ、アルケード。」
ラカンが前に立って声をかけると、犬はワン！　と答えた。
「ラカン、行き止まりみたいだね。見たところドアも無いみたいだし……」
「ドアなら目の前よ。」
「え？」
ルフォールは驚いた。なぜなら、彼女がドアと言ったのは、目の前に広がる壁なのだ。ルフォールは目を凝らしてよ～く観察したが、どこをどう見てもドアらしきものはないし、それらしい継ぎ目も見えない。ざっと見たところで、ルフォールは声を張り上げた。
「これがドア！？」
ラカンはクスリと笑うと、壁の中心に手を当てた。すると、壁の中心から青白い光が放たれ、その光が壁を吸い込むように消していった。そう、消したのだ。消された壁の向こうには部屋が続いている。薄暗くてよく見えないが、部屋の中には何かの機械が置いてあるようだ。
「ラカン……これは……」
「ちょっと待ってて。」
そう言うと彼女は目をつむると、静かに喋りだした。
「オン・マクナ・ドナ・メグラ・ピドス・ラム」
すると、部屋から何か音が響き始めた。ルフォールには想像がつかないが、機械音とでもいえばいいのだろうか。その音を確認した

かのように、ラカンは続けて言葉を出した。
「エグデオンデマス・ソト・マヌラ」
ルフォールは、この言葉に聞き覚えがあった。古代エイブラ語で『光の祝福を』という意味だ。その言葉どおりか、部屋に灯りがともされた。そこに姿を現したのは、巨大なカプセルだった。それは天井と床から伸びているパイプで固定されているように見える。ラカンは部屋に入っていくと、何かの前で立ち止まった。ルフォールが後ろから覗き込むと、彼女の指がしきりに動いているのが分かる。何かを操作しているようだ。机の表面には、彼女が指を動かすたびに文字が現れている。
「ラカン、これは何なんだい？」
彼女は作業をしながら答えた。
「転送装置よ。」
「転送…装置？」
「ルフォール、オーバーアイルの今の交通手段は、あの羽の生えた乗り物よね？」
「あぁ、スカイ・バスかい？」
答えてから、ルフォールはおかしな事に気が付いた。
「ちょっと待って。ラカン、君はスカイ・バスを知らないのかい？」
あらかたの作業を終えると、ラカンはルフォールの方に振り向いた。機械からは何やら低い唸り声が聞こえる。
「千年前には、あんな乗り物はなかったから。それに、あなたが意識を取り戻したときも、同じ事言ったわよ。」
ルフォールは、彼女の返事に唖然とした。しかし、彼女はそんなルフォールには目もくれず続けた。
「千年前のオーバーアイルでは、こんな転送装置が使われていたの。全ての島にこれがあったわ。目的地の座標を設定すると、カプセルの中身を一瞬で運んでくれる。人でも荷物でも何でも。だけど、紅蓮戦争が起こった時にほとんどの国で破壊されたの。これに爆弾とかを入れて、転送した先で爆破させる事件があってね。これを開発

した人は、嘆きながら壊していったと聞いたわ。とても悔しかったんでしょうね。人の為と思って作ったものが戦争で、人殺しの道具に使われたんだから。それ以降、この装置が使われる事は無くなった。今ではほとんど残っていないしね。それからじゃないかしら。あんな乗り物が現れたのは。」

ルフォールは信じられなかった。彼女は確かに千年前の事を語っているのだ。今の時代にスカイ・バスを知らない人間はいない。それほど普及しているものだからだ。だが、彼女は知らなかった。それが、彼女が少なからず、スカイ・バス以前……いや、今の文明から取り残された存在だと言うことを物語っているのではないだろうか。

「ラカン……君はやっぱり……千年前からこの島に……？　それじゃ、紅蓮戦争も……発端はやっぱり君が？」

「それはどうかしら。ご想像にお任せするわ。」

ラカンは悪戯っぽく笑って見せた。ルフォールは少々すかをくらってしまったようだ。だが、疑問がある。ルフォールはラカンに質問した。

「でも、君はさっき言ったよね？この装置はほとんど残っていないって……それなら、エイブラのも破壊されてるんじゃ。」

「大丈夫、エイブラには残っているわ。さっき確認したから。」

なるほど、先ほどの作業は、この機械の存在を確かめる為だったのだ。だとすれば、動いているところを見ると、エイブラの装置も無事という事になる。だが、物事は思うようには進まないのが現実だ。

「ただ、長い間使っていなかったからエネルギーのチャージが必要ね。もうほとんど空っぽみたいだから。」

彼女の言葉は、ルフォールを見事に失望させた。どうやら今すぐには帰れないということだ。ルフォールはがっかりしつつも口を開いた。

「……そうなんだ……それって、どれくらいかかるものなんだい？」

「そうね、通常なら一日あれば満タンになるんだけど……この状態なら……」
「この状態なら？」
ラカンは少し困った顔で笑った。
「約一ヶ月ね……」

第五章　知識の間

「一ヶ月かぁ……」
部屋に戻ったルフォールは天井を見上げた。しかし、見上げたところでなんの変化もない。ただ、黒ずんでいるだけだ。
ラカンのおかげで、なんとかエイブラへの帰還方法を見つけたルフォールだが、思わぬところで足止めを食ってしまった。まさか、エネルギーが切れているとは……
「一ヶ月何をすればいいんだろ……」
ルフォールは気が遠くなる思いだった。
「ルフォール、いいかしら？」
彼女の声がした。ルフォールはベッドから飛び起きると、ドアを開けに行った。
「……どうしたんだい？」
ラカンははにかみながら口を開いた。
「一ヶ月もこの島にいるのはちょっと暇かなぁと思って。ルフォールは学者さんでしょ？　ついてきて！」
そう言うとラカンは歩き出した。ルフォールはきょとんとしていたが、すぐに彼女を追いかけた。
廊下を五分は歩いただろうか。ラカンは立ち止まった。彼女の前にはドアらしき物がある。
「ここよ。」
ラカンが言うと、ドアは勝手に開き（それも横にスライドして）、中に入ると明かりがひとりでに灯された。明かりの下には、何か机のようなものがある。転送装置の置いてある部屋にも似た机があったが、少しデザインが違っているようだ。
「ここは何だい？」
「知識の間よ。」
「知識の間？」

ラカンは机の前に座ると、何やら操作を始めた。すると机の前の黒いガラスのようなものに灯りが付いた。中には様々な文字が映し出されている。
「すごい、文字が一人でに出てる……あの部屋のと同じだ……」
「情報ディスプレイって言うの。この部屋には、オーバーアイルで起こった様々な出来事が千年に渡って記録されてるわ。紅蓮戦争の始まりから、オーバーアイルの一時崩壊まで……再構築から安定された今の状況まで詳しく書かれている。私がオーバーアイルの現状をある程度把握できるのも、この部屋があるおかげなの。」
ルフォールは圧巻だった。彼は装置を見回した。自分の求めている歴史が今、目の前にあるのだ。気が付くと、体は身震いすらしていた。
「千年……紅蓮戦争以前……」
ルフォールは何かぶつぶつ言い出した。彼の頭の中で様々な情報が飛び交っている。ルフォールは深く息を吸い込むと、操作を続けているラカンのほうへと振り返った。
「ラカン……そうすると、ミッシング・ミレニアムも……分かるのかい？」
震えを堪えながら口を開くが、その声はやはり震えている。ラカンはその質問を受けて、下を向きながらジッと何かを考えていたようだが、やがて顔を上げて答えた。
「失われた千年紀……そうね。分かるかもしれない。」
彼女は静かに答えた。彼女の答えに、ルフォールはただ興奮していた。
「すごい……ここは……宝の山だよ……オーバーアイルの歴史が記録されているなんて……ミッシング・ミレニアムの事が分かれば、世界的発見だ！エイブラに帰ったらすぐに調査隊を結成して、調査が終わり次第この事を世界に知らせないと！！」
「また戦争が起きるわよ。」
「え……？」

ルフォールはラカンのほうへ目を向けた。いつの間にか作業を終えた彼女の視線は冷たくルフォールに突き刺さる。
「ルフォール、この機械にはね。ミッシング・ミレニアムだったかしら？　千年前の兵器の事なんかも記録されてるわ。これを世界に公表したら、それ欲しさにまた国々が戦争を起こすに決まってる。」
「そんな……そんな事ない！　だって、みんなの知りたがってる事ばかりだよ！　今までどんなに調べても推測でしか議論されなかった過去が明らかになるんだよ！　素晴らしい事なのに……」
ルフォールは必死で反論するが、その声は段々力を失っていった。
「失われた歴史を取り戻すのは、今を生きる人の使命かもしれないわ。でも、過去の人たちが残さなかったということは、知られたくないって事なんじゃないかしら？自分たちの残してしまった過ちを未来に託すなんて愚かな事はできないってことかも。」
ラカンは淡々と言葉をルフォールに投げかけていった。
「今を生きる人達が過去の過ちを背負ってるなら、それを認めて未来を築くべきなのかもね。そうじゃなかったら過去の過ちを繰り返すだけよ。そして滅ぶだけ。千年前と同じように……」
そう言うラカンの目は、とても悲しげに見えた。恐らく彼女は千年前に見てきたのだろう。人が、強大な力を持つとどうなるかを、彼女は知っているのだ。そして、その結末も……
沈黙だけが二人を包んでいた。しばらくして、ルフォールは静かに机の前に歩み出た。そして、彼女に向き直り、問いかけた。
「ラカン、使い方を教えてくれないかな？」
「え……？」
「ここには、過去の歴史が詰まってるんだ。さっきまで僕は考古学者として、ここにある歴史の価値ばかり考えていたよ。でも、今の君の話を聞いて、僕たちの今は過去の過ちの上に成り立っているって事がよく分かった。だから、知りたいんだ。過去に何があったのか……ミッシング・ミレニアムに記されている歴史は、きっと、今を生きる僕らにとっては危険なものかもしれない。でも、それを知

る事によって、その過ちを繰り返す事は無くなると思うんだ。甘いかもしれないけどね。でも、僕は今生きているこの時代に絶望したくない。未来の人にそう思われたくないからね。」

ルフォールは悪戯っぽく笑ってみせた。それにつられてか、ラカンも笑っていた。ルフォールは、この島で彼女に出会ってから、彼女が声を出して笑っている姿を見た事がない。それは、彼女がどこかに感情を置き忘れてきたようにも思えた。だけど、今彼の目の前にはあどけない笑顔で笑っている少女がいる。まるで、どこかで無くした忘れ物を取り戻したかのように。ルフォールは安堵した。そして、彼は彼女に対する自分の気持ちも見つけた。だが、それは一時の感情なのかもしれない。けれども、目の前で彼女が笑っている。彼にはそれで十分なのかもしれない。

二人の笑い声はいつまでも続いていた。

第六章　帰還、そして悲しみの降臨

時が経つのは早いもので、ルフォールがこの島に来て（？）から一ヶ月が経過しようとしていた。ルフォールもこの島での生活に慣れたのか、わりと気楽に過ごして来た。とは言っても遊んでいたばかりではない。炊事に洗濯、畑に野菜を収穫しに行ったりもした。オーバーアイルでは取れない、地上独特の野菜だが（色が赤とか、緑とか……奇抜なものばかりだ……）味はなかなか、見た目より美味しかったりする。その合間に、知識の間で、過去の出来事に触れていた。さすがオーバーアイルの千年を記録したデータバンクだ。学会で謎とされてきた過去の出来事がどんどん出てくる。どれも貴重な記録だが、なかでも『ラカン』に関する記録が、彼の目を一番ひいた。もともと彼の研究は彼女を中心に行ってきたものである。このデータバンクに記録されている少女が、彼女と同一人物だという確証はまだないが、やはりどこか似ている点は多くあるようだ。これは、長年彼女を研究してきたルフォールの勘だ。そして、読み進めていくうちに、驚くべきことが発覚した。

「ラカンは二人いた…？」

ルフォールは驚きを隠せなかった。今までの研究では、彼女は一人でこの世界を焼き払ったとされている。だが、ここの記述ではまったく違うことが記されているのだ。

「これを学会で発表したら、世界がひっくり返るな…」

そうつぶやくと、ルフォールは一人で苦笑していた。その時……

カタン……

物音がした。その方向を見ると、そこにはアルケードが座っていた。その目は、ひどくぎらついて、気を抜けば飛び掛ってきそうな気配がする。この犬はいつもそうだ。ラカンといる時は何でもない顔でいるが、ルフォールだけになると、何か警戒しているようになる。

犬は苦手だなぁ……
そう思って、ルフォールが席を立とうとすると、今度はラカンの声がした。
「アルケード！　どこ行ったの？」
「ワン！」
アルケードが応えると、ドアが開いた。
「も～、こんなところにいたの？　いつまでたっても帰ってこないんだから！」
入ってくるなり、ラカンは毒づいた。しかし、それを無視するようにアルケードは部屋から出て行った。
「ふん、訳分かんない！　べーだ！　ルフォール、ご飯できたわよ！早く来てね！」
そう言って微笑むと、ラカンはまた「アルケード！」と叫びながら出て行った。
「まさかね……」
ラカンを見送りながら、ルフォールはつぶやいた。

「転送装置のエネルギー、もうすぐ満タンになるわよ。」
食事をしながら、ラカンはルフォールにそう告げた。
「今の時点で九割は溜まってたから……明日の昼には使えるようになるわ。」
「そうなんだぁ。」
シチューを口に運びながらルフォールは返事をした。なんだか、他人事のようだ。
「ちょっと！　嬉しくないの？」
「いい、いや！　嬉しいよ！！　やった！帰れる！」
そう言ってルフォールはシチューを口にかきこんだ。どうも答えがわざとらしい。その様子を見ながら、ラカンは言った。
「荷物とか、ちゃんとまとめといてね。あ、何か持って帰りたい本とかあれば持ってっていいわよ！置いといても邪魔になっちゃうし。

」

そう言われ、ルフォールは「うん」とうなづくと、食器を置きながら言った。

「ラカン、あとで散歩でもしないかい？　今日はちょうど月も出てるだろうし、外も明るいと思うんだ。いいかな。」

ラカンは、少し考えたように見えたが、お茶を入れて持ってきたときに答えてくれた。食器を片付けたらいつでもいいと言ったので、ルフォールはお茶をすすって席を立ち、自分の部屋に戻った。

部屋に戻ったルフォールは、帰りの荷物をまとめていた。といっても、エアプレーンが墜落したときに、手持ちの荷物は全部無くなってしまった。あるとすれば、この島で着ていた服と、ラカンが持って帰っていいと言ってくれた数札の本だけ。あとは何も無い。

……一ヶ月前は大荷物だったのにな……

ルフォールはベッドに横になった。ラカンが食器を片付けるまで、もう少し時間がある。ルフォールはカバンから一冊の本を取り出すと、ぱらぱらとめくりだした。そうしていると、この島での一ヶ月が事細かに思い出される。短い時間だったが、とても密度が濃かった。驚かされる事ばかりだった。明日にはこの島ともお別れだ。アルケードとも、ラカンとも……これでいいのだろうか……いや、いいんだ……

自問自答を繰り返している内に睡魔が襲ってきた。誘われるままに、ルフォールは眠りに落ちてしまった。

時は満ちた。ルフォールは、一ヶ月前エネルギーが空だった転送装置の前に立っている。横にはラカン、アルケードが並んでいる。彼女達は見送り人だ。ラカンは、装置の制御装置のスイッチを入れた。ブーンと低く唸る音が聞こえる。ディスプレイには次々と表示が現れている。ラカンはそれをチェックし、転送先の座標を設定、固定した。転送目標はエイブラだ。

「ルフォール、いいわよ。」

彼女がそう言うと、彼は装置の中へ進んだ。装置の中は、光が飛んでは消えていく、不思議な光景を描いている。この光たちも、どこかへ行くのだろうか。ルフォールはふと思った。振り返ると、目の前にはラカンがいた。ラカンの口が静かに開く。
「転送準備中よ、あと一分であなたは故郷へ帰れるわ。」
「ラカン……」
ふと、彼女の頬を涙が伝った。初めてみる、彼女の涙……
「ルフォール、もう会えないのね……」
『転送開始まで、あと四十秒』
二人は手を重ねた。
「約束する。僕は必ず戻ってくるよ。」
「いいの、これが運命だから……」
『転送開始まで、あと二十秒……』
「ルフォール……」
ルフォールの体が光の粒子へ変換される中、二人は唇を重ねた。その瞬間が、いかに長く、いかに短く感じられた事だろうか。自分の意識が光に溶かされる中で、ルフォールはラカンの声を聞いた。
……愛している……
その言葉を反復しながら、ルフォールの意識は遠ざかって行く。
さようなら……ラカン……

光は島の中央に位置する山から天高く舞い登って行った。それはまさしく、天かける龍の姿にそっくりだった。光が舞い上がる中、ラカンとアルケードは浜辺へと歩み出た。
「行ってしまったなぁ。」
アルケードが口を開く。
「そうね……」
彼女は力なく答えた。
「良かったのか？　本当は行かせたくなかったんだろ？」
「仕方ないわ。彼には帰る場所があるんだもの。」

「だから、昨日の茶に眠り薬なんか混ぜたのか？」
二人は沈黙した。月は丸く二人を照らし、その姿はさざなみで揺れていた。
「引き止めたくなかったの。彼にはちゃんとした自分の居場所があるんだし、それは私にも言えてるし……二人になったら、きっと引き止めてしまうだろうから。」
「ついていって良かったんだぞ。償いは十分したじゃないか。」
ラカンは首を横に振った。
「駄目。私の罪は償っても償いきれるものじゃないわ。それに、彼と私じゃ、住む世界が違いすぎるもの。それに……私は……」
「暴走が怖いのか？」
ラカンはうなづいた。
「……あの時の光景……今でも覚えてる……紅い炎……この手をなぎ払っただけで、周りにあるもの全てが焼き尽くされた……」
そう言ってラカンは手を前にかざした。指の隙間から海が見える。その中に、何か赤い点のようなものがいくつか見えた。
「いかん！　ラカン！！」
アルケードが吼えた。ラカンは海に手をかざしたままだ。赤い点はどんどん増えていく。
「ラカン！　奴らだ！　マータが来るぞ！」
アルケードはラカンに吼えるが、まるで聞こえていないようだ。意識がどこかに行ってしまっているのだろうか。彼の声は、彼女にまったく届いていない。
「ちぃ！　奴ら、上陸する気か！？」
アルケードは身構えた。
……ラカンがどうにもならん今、私が何とかするしかないか……！
海の中から、赤い点の持ち主が次々と姿を現した。それは人形だった。瞳が赤く光り、その指先は鋭く尖っていた。まるで切れ味の良いナイフのようだ。チキチキと鳴らしている。奴らは、切りかかるタイミングをうかがっていた。アルケードもそれに応えるかのよ

うに低く身構えている。遠くで魚が跳ねる音がした。
来た。奴らが飛び掛ってきた。ラカン……逃げろ！
アルケードも飛び掛ろうとした瞬間……
バキーン！！
何かが吹き飛ばされた。だが、それはアルケードではない。人形だ。飛び掛ってきた数体のマータが木っ端微塵にされ、海に落ちていった。奴らが一歩ずつ退きだした。奴らの赤い目にはそれが映っている。金色の風に漂う、一人の少女が。
「ラ……ラカン……」
アルケードが話しかけると、彼女は手をかざした。途端、目の前にいたマータが次々と吹き飛んで行く。彼女は口を開いた。
「我はラカンではない。わが名は、絶対なる破壊者！　全てを無に帰す者だ！！」

第七章　古の森

ルフォールが目を覚ますと、そこには見慣れない景色が広がっていた。どうやら、長い時間ではないが気絶していたようだ。ぼんやりだが景色がはっきりしてくると、辺りの様子がはっきりしてきた。机上の操作パネルに壁にはおそらく何かの表示板。自分が寝転がっているのは、地上の島で転送されたのと同じカプセル。

ふらつきながらも体を起こすと、ルフォールは起き上がった。自分の前には扉がある。それの上側にはプレートが貼り付けられていた。ルフォールが目を凝らして見ると、

…エグデオンデマス・ソト・マヌラ…

そう掘り込まれていた。どうやらここは地上の遺跡にあったのと同じ、転送ルームのようだ。ルフォールはカプセルの底から降りると、ゆっくり扉に近づいた。人々に忘れ去られたのだろうか、埃が積もっていて、歩くたびにバフッバフッと音を立てる。どうやら、何百年も人の出入りがないようだ。ラカンの説明によると、エイブラに座標を合わせて送ってくれたようだが、果たして戻ってこれたのだろうか。少し不安になったが、扉までたどり着くとその不安もなくなっていた。扉にも文字が掘り込まれている。ルフォールは声に出してそれを読んだ。

「光よ、我を解き放て。大いなる豊穣と栄光と共にここに記す…エルシス３世…」

今の国王はエルシス１６世だ。つまり、ルフォールの父親である。ここに刻まれているのは、エルシス３世の言葉だ。古代エイブラの言葉で記されている。間違いない。ここはエイブラだ。しかし、どこなのだろうか。ルフォールには全く見当がつかない。とにかく外に出ることが先決だ。だが、扉は横に引いても前に押しても開かない。

「どうなってるんだ？」

分からないことだらけだ。今まではラカンがいたから何とかなっていたが、自分ひとりでやるのは初めてだ。どうすれば扉は開くのだろうか…

「…あ！」

ルフォールはあることを思い出した。そういえば、ラカンは転送ルームに入る時、壁に手を当てていた。その時はそれで扉が開いたが、中に入ってからなにか言葉を言っていた。合言葉なのだろうか、その言葉で機械が作動したのだ。もしかしたら、扉も開くかもしれない。

「えーと…」

ルフォールは必死で思い出そうとした。あの時のラカンの言葉…あの情景が浮かんでくる。少しづつだが思い出してきた。そしてそれを口に出してみた。

「…オン・マクナ・ドナ・メグラ・ピドス・ラム。」

何も起こらない…

「あ、そうか！」

手を当てていなかった。今度はしっかり手を当てて、同じ言葉を繰り返した。

「オン・マクナ・ドナ・メグラ・ピドス・ラム！」

すると、どうだろう。扉は一瞬白く光ったかと思うと、ゴゴゴっという音と共に開かれたではないか。扉の向こうには密林が見える。

ルフォールはそっと歩み出た。そこは間違いなくジャングルだった。木が生い茂り、豊かな葉をつけた枝は空を覆い隠すほどに伸びている。その間から、木漏れ日が降り注いでいた。

ルフォールが辺りを見ると、そこかしこに何かの瓦礫がある。近くにある瓦礫に近づき、よく見てみると何か文字が掘り込まれている。

「これは…古代エイブラ語？」

ルフォールは読んでみた。

『空より大いなる災厄が訪れた。我らが力では太刀打ちすることも相成らぬ…』

瓦礫にはそれだけが刻まれていた。他の瓦礫を見ると、それにも何か刻まれているのが見えた。ルフォールは、別の瓦礫に移動し、そこに刻まれている文字を解読した。

『我エルシス三世はここに誓う。我ら王家、末代までこの者たちを見守らん。再び災厄が訪れしその時まで…』

「…ここにもエルシス三世の言葉がある…ここは一体…」

これでこの森はエイブラであるという事は分かった。問題はこのジャングルをどう抜けるか、だ。方角も分からない。自分の位置も分からない。こんなことなら地理の勉強もしておくべきだった。地理学者は、雲の動きと太陽の位置から方角を導き出せるという。今更ながら後悔しても始まらないが…。

色々考え込むうちにふと何かに目が止まった。

「…んん？」

よ～く見ると、土の中から石畳が見える。その先に目を延ばすと、所々ではあるが、石畳が見えている。

ルフォールはニヤッとした。

「間違いない…通路だ！」

ルフォールは迷う事なく、その石畳の通路を進んでいった。何故だか分からないが、この先に故郷の街があるように思えたのだ。そう思うと、はやる気持ちを抑えることはできず、次第に足早になっていった。

歩きながら、ルフォールはある事に気がついた。ジャングルの割に、遺跡のような物が数多くあるのだ。しかも、一定の間隔を置いて…である。中には、何かの入り口の跡のようなものもあった。遠くには高い壁のような物が見える。明らかに住居の跡だが、はっきりとは分からなかった。

そして三十分ほど歩いただろうか、森の終わりが見えてきた。

森を抜けると、街が見えた。オーバーアイルで最大を誇り、美しく並ぶ町並み。その雰囲気からは、歩んできた歴史さえ伺えるほどだ。

エイブラである。
ルフォールは今来た道を振り返った。密林の奥はすでに闇で覆われている。そして、何かを確認すると今度は街のほうへ顔を向けた。
「あそこに王宮がある。そして、応急の南には城下町…この森は王宮から南東に位置する。ということは…！」
ルフォールはもう一度森を見た。
「ここはアクロの丘…そして、この森は『眠りの森』…」
ルフォールは視線を通路に落とした。そこには石畳が敷き詰められ、通路の中央には何かの紋章が刻まれている。ルフォールはこれを確認したのだ。旧エイブラの…千年前のエルシス王家の紋章…翼の刻印を…
「間違いない。この森は…いや、ここは旧エイブラの城跡…エレドア城があった場所なんだ…」
ルフォールは森を見上げていた。感動に浸っている場合ではないのだが、浸らずにはいられらなかった。とにかく落ち着きを取り戻した彼は、一旦王宮に向かう事にした。何より、まずは自分が無事な事を父上に伝えるべきだ。彼はそう考えたのだ。遺跡の調査は落ち着いてからゆっくり行うとしよう。
ルフォールの足取りは軽かった。

第八章　王都の変貌

街中に入ると様子がおかしかった。いつもは活気に溢れ、人通りの多い街が静まり返っている。まるで何かに怯えるかのように家々の窓は堅く閉ざされている。

「どうしたんだろう…」

辺りの様子を伺いながら、ルフォールは歩き始めた。何か情報が聞けそうなところはないだろうか？そう思ってキョロキョロと周りを見るが、どの家も扉は厳重に締まっているようだ。店に至っては営業の看板はなく、どこも自分の店の看板すら掲げていない。

「この辺りは、一番にぎやかだったのに…」

ルフォールは、久しぶりに訪れた故郷の変貌に戸惑いを隠せなかった。

とその時、目の前を何かが横切った。それは路地から路地へ移動し、物陰に身を隠しながらルフォールを睨んでいた。やはり怯えている。その原因は何なのか？ルフォールは立ち止まり、その目線の方をみた。よく見ると、まだ子どものようだ。

「あの子なら…何か知っているかもしれない。」

そう言うと、ルフォールは目線の方へ歩みだした。だが、それもじっとはしていない。ルフォールが向かってくるのを見ると、それも路地の中へ逃げ込んでしまった。

「あ、待ってくれ！」

ルフォールは路地目掛けて走り出した。今見逃すと、しばらく人に会えなくなる。ルフォールはなんとなくそう感じた。とにかく今は、エイブラに何が起こっているのかを知らなければならない。そう思うと、走るスピードは自然と速くなった。あっという間に路地まで入ると、そこにはもう人の姿はなかった。ルフォールはゼェゼェとした息づかいで辺りを見回した。が、人影も何も無い。あるのは、建物と建物の間に続く薄暗い路地だけだ。

ルフォールは、乱れた息を深呼吸で整えると残念そうに来た道へと振り返った。途端、ルフォールの体が凄い力で持ち上げられた！
「…くっ！うぐ！」
苦しそうにしながら下を見ると、ガッチリとした体格の男がルフォールの胸倉を掴み持ち上げている。その形相はおぞましく歪んでいた。
「う…な、何を！」
「やかましい！国を…街をこんなめちゃめちゃにしやがって！てめぇら王家は何を考えてやがる！！」
「ぼ…僕は…今帰っ…たば…かり…」
「何だと！？しらばっくれるのか？気にいらねぇ！ますますぶっ殺したくなったぜ！」
男はそう吐き捨てると、皆倉を掴んでいる手にさらに力を込めた。ルフォールは首を絞められ、息もできない。
「…うっ…ぅ…」
男は更に力を込めた。首の辺りがミシミシと音を立てる。男の手を掴んでいたルフォールの手から次第に力が無くなり、そのままだらりと滑り落ちた。意識が薄くなり、目の前が薄暗くなってきた。
…ここまで来たのに…殺されるのか…
ルフォールの体から力が抜け始めた時、
「お止め！！」
女性の声が聞こえた。男が反論するのが聞こえる。
「バーバラ！止めるな！こいつは王家の人間だ！殺して当然だろう！？」
「フリンク！相手を間違えちゃいけないよ。我々の敵はリーディスだろう？このお方は、弟君のルフォール王子だよ。」
「弟だろうが王家だろう？俺は王家の人間が憎い！」
女性は更に声を強めた。
「いい加減にしな！そんなことして、アンリが喜ぶと思っているのかい！？あんたのしていることは王家と同じだよ！無抵抗の人間を

殺すんだからね。いや、人間以下かもね…」
「…くっ…ちくしょー！！」
男は叫ぶとルフォールを地面に叩きつけた。あまりの衝撃にルフォールは意識を取り戻す事ができたが、激痛と激しい咳き込みにのた打ち回った。
「大丈夫かい？許してやっておくれ。あの男は、王家の軍隊に自分の女房を殺されたんだ。」
女性はルフォールの前まで近づくと、そのまましゃがみこみ、彼の体を優しくおこした。
「げほっ！げほっ！はぁ…」
体を起こしてもらったことで、ルフォールは呼吸が楽になった。女性はルフォールに尋ねた。
「あんた、ルフォール王子だね？一ヶ月前にスカイ・バスの事故で死んだって聞いたけど…生きてたんだね？」
ルフォールは、女性の方へ向き直った。
「はい、なんとか助かる事ができました。それより、エイブラはどうなったんですか？前は明るく活気のある国だったのに…今は…何か違います。」
「それは…」
女性が口を開くと、空からゴー！という爆音…いやエンジンの音が聞こえた。ルフォールがその音のする方へ顔を向けると、それは現れた。
巨大な翼に龍のような胴体。大きさは軽く百メートルはあるだろう。外装は黒く塗られ、胴体には剣に翼の紋章が描かれている。
「あ…あれは…黒龍号…なぜ…」
男はあきれたように聞いた。
「お前…本当に何も知らないのかよ。この国は、今戦争してるんだぜ。」
「戦争！？馬鹿な！一体誰がこんなことを！父上は…こんなことは…」

目の前の事を疑うルフォールに女性は言った。
「リーディス王子だよ。いや、今はエルシス十七世か。彼が、周りの国に対して戦争を仕掛けたのさ。」
「兄上が…父は…エルシス十六世は…？」
「死んだぜ。一ヶ月前にな。」
男の言った一言に、ルフォールは目の前が暗くなった。何も無い、全てが暗闇の世界に放り投げられたようだ。
父の死、兄の凶行。
ルフォールは一瞬でこの国に起きた事を悟った。だが、それは父と同じ理想を目指していた兄の行動とは逆だった。ルフォールの体が震えている。それは恐怖からか、悲しみからか。
女性が静かに声をかけた。
「ここは危ない。ルフォール王子。とにかく今はここを離れよう。私らの隠れ家に来るといい。夜になれば、ハンターがここらを捜索に来る。さぁ。」
女性がルフォールの手を取り引っ張ったが、彼はそれを振りほどいた。
「王子…？」
ルフォールは静かに立ち上がった。
「皆さんは、早くここを立ち去ってください。」
「だけど、あんたは！？」
「僕は、王宮へ行きます。」
「てめぇ！バーバラの話を聞いていなかったのか？行ったって殺されるだけだぜ！せっかく連れて行ってやるって言ってんのに…」
男はそこまで言うと口を閉じた。ルフォールがこっちを向いたからだ。いや、向いただけではない。その顔は…先ほどとは打って変わって違う。まるで…
まるで…怒り狂った獣…
男はぞっとした。さっきまでの優男がここまで変わった。
…俺はこいつを殺そうとしたのか…

「皆さんは早く。僕は、王家の者として確認しなければならない。誰がこんな愚行を行っているのか…僕には止める義務がある！」
そういうと、ルフォールは走り出した。
「王子！！」
女性が路地から出ると、ルフォールは小さな人影になっていた。
女性は、胸に手を当てると神に祈った。
どうか、彼が無事であるように…と。

第九章　兄との再会

王宮があるのは、首都の中央。誓いの円卓と呼ばれる、紅蓮戦争で活躍した英雄の像が並ぶ公園の奥に入り口がある。その周りは堀で囲まれ、この街を見下ろすように悠然と聳え立っている。その外観は見るからに古く、その歴史を何か物語るようだ。

ルフォールは誓いの円卓を走り抜け、王宮の入り口にかかる桟橋を目指した。桟橋の長さは約二十メートル。夜には王宮の入り口を覆うように持ち上げられ、出入りが不可能になる。

よく兄上と夜中抜け出して街を散歩したなぁ。

ふとルフォールは昔を思い出していた。六つ年上の兄は、嫌がるルフォールを無理やり連れ出し、抜け道からそっと街に忍び出る。そして、夜の街を散歩するのだが、そのスリルといったらなかった。一度やると、今度はルフォールが兄を無理やり連れ出すようになってしまい、そのうちに門番に見つかって、父に大目玉をくらったのだ。あの抜け道はまだあるんだろうか……そうこうしているうちに、王宮の入り口まで差し掛かった。門の左右に一人ずつ門番がいるが、ルフォールはかまう事なく走りぬけようとした。だが……

「待たれよ！！」

やはり、門番に止められた。右にいる門番がルフォールを持っていた槍で制し、左にいた門番はニヤニヤしながら二人に寄ってきた。

「いくら門が開放されているからとはいえ、許可無く走り去ろうとは見過ごせぬ。何用だ？冷やかしなら、今すぐ立ち去れ！！」

ルフォールはうつむきながら口を開いた。

「そなた、名は何と言う？　階級は？」

「はぁ？」

門番は聞き返した。そして、隣にきたもう一人と「こいつはいかれているのか」などと笑っている。ルフォールは門番を睨みつけた。

「私の顔を忘れたか？　第二王子、ルフォールであるぞ！」

「えっ！？」
聞いた途端、二人の顔が蒼ざめていく。
「聞こえていなかったのか？　今すぐ通せ！」
二人はしばらく硬直していた。
「通さぬか！！」
「は、はい！」
ルフォールが怒鳴ると、二人はすぐさま槍を引き道を開けた。開かれた道を、ルフォールは迷う事なく走り抜けた。門を抜け、ホール、階段を駆け上がり、二階の広間から続く回廊を走りぬける。途中で何度も人とぶつかりそうになった。給仕、近衛兵、はたまた何処かの子どもたち。皆、一目散に駆け抜けるルフォールに目を奪われたが、ルフォールは気にしていなかった。いや、目に入らなかったのだ。今のルフォールが目指すのは王宮の三階、中央に位置する玉座の間。父、エルシス十六世のいる部屋だ。回廊の先にある階段を駆け上がり、三階の踊り場に出ると、目の前には豪華絢爛な扉が佇んでいた。
こんな扉じゃなかった……
ルフォールはゆっくりと近づき、ドアノブに手を乗せた。緊張が全身に走る。ルフォールは深呼吸すると、ゆっくりとノブを回した。扉が静かに開く。中に足を踏み入れると、そこは玉座の間だった。父がいた、あの部屋だ。何も変わっていない。窓から入る光。天井や壁に施された装飾。エイブラの歴史の全てがそこに刻まれているようだ。父の部屋はただ一つをのぞいて変わっていなかった。変わっているのは、玉座に佇んでいる人物。ルフォールはその光景に溜まらず口を開いた。
「……兄上……」
ルフォールの兄……リーディス・エルシスが玉座に座っていたのだ。リーディスは静かに口を開いた。
「久しいな、ルフォール……」
二人の間に微妙な空気が流れる。ルフォールは疑問で頭が一杯だ

った。何故兄上がそこにいる？　父上は？　黒龍号は何故出撃したのか……聞きたいことは山ほどある。
「あ…あの…」
「ルフォール。貴様、この一ヶ月何をしていたのだ？」
「……え？」
ルフォールは聞き返した。
「この一ヶ月何をしていたかと聞いている。父上はお前が帰ってくるのを楽しみにしておられたのだぞ。それがあんな事になろうとは……」
リーディスは指を額に添えながらうなだれた。
「兄上……父上はどうされたのです？」
ルフォールの言葉に、彼は冷たく言い放った。
「亡くなられた。」
「……！」
ルフォールを絶望が包む。父上が死んだ……何故……病気など一度もされたことがなかったのに……それとも事故か……
「はやり病でな、気付いた時には遅かった。」
リーディスの言葉が、部屋中に冷たく響く。ルフォールはただ黙っていた。
「大変だったぞ。急な事だったからな。国葬の準備に、王座継承の儀……ようやく全てが片付き、我が野望を実現できる。」
「……野望……？」
リーディスは微笑みながら、滑らかな口調でしゃべりだした。
「そうだ。お前はおかしいと思わぬか？このエイブラはオーバーアイルの中で最も歴史が深く、最も強大だ。だが、脆弱な他国はそれを認めようとはせぬ！これでは、先代たちに顔がたたん。わがエルシス家は、エイブラ創立以来、常に王座の地位にある。最高の国の最高の民の頂点に君臨し続けてきたのだ。そして、この誇り高き国はオーバーアイルでも頂点に立つべき存在。だが、周りの諸国のわが国に対する態度のなんと無礼な事。このままでは、エイブラの誇

りに傷がつく！」
　リーディスの顔は歓喜に歪んでいた。ルフォールにはそう見えた。周りの者は何をしている？何故兄上を止めないのだ…疑問だけがルフォールを駆け巡った。
「……兄上……一体何をお考えなのです？」
　リーディスは再び微笑んだ。そして、言った。
「エイブラによる、オーバーアイルの統治だ……」
　その瞬間、ルフォールの心に炎が舞い上がった。怒りの炎だ。そして、ルフォールは全ての謎が解けた。…体中を走り回っていた疑問は全て吹き飛び、それは彼の口から飛び出してきた。
「兄上！　それは父上のお望みですか？　それとも、兄上の独断ですか？」
　リーディスは目を細めた。その目は、ルフォールの心を貫くように鋭い。だが、ルフォールはひるむ事無く言い放った。
「そんな事、私が許しませぬ！　あなたは何を考えておいでだ！父上は……いや、先代たちは……そのような事を望んでおりませぬ！！　そんな事の為に戦争を仕掛けたのですか！！　あなたは、一度として民たちを見たのか？　あの街を見たのか？　民は苦しみ……街はすさみ……子供たちは震え上がっている……これが、わがエルシス家が治める国の姿なのですか？戦争などオーバーアイルの統治など……愚か者のすることだ！！！」
　その言葉を聞いて、リーディスは怒りを顔に表した。
「貴様！　一体誰に向かって口を聞いている！？　私のやっていることが間違っているだと……これは改革だ！　この国……いや、オーバーアイルは変革が必要なのだ！　この大陸中に蔓延している古き悪循環を終わりにさせる！　それを行って何が悪い！！」
　パチパチパチ……
　誰かが手を叩いている。その音が聞こえた時、二人の怒号は一瞬にして消えた。いや、その音が消したのだ。それは、玉座のすぐ横から聞こえてきた。ルフォールがそっと目を移すと、玉座の横に人

が立っている。長身の、目の冷たい男……
「いやいや、リーディス王をここまで怒らせるとは……やりますなぁ、弟君。」
そう言うと、男は再び手を叩き始めた。彼の姿を見ると、リーディスは何か安心したかのように微笑み、話しかけた。
「おぉ、カルバン！　戻ったか！」
カルバンと呼ばれた、長身の男は、ゆっくりとリーディスの方へ向き、一礼した。
「ゲバナ前線は我が軍の圧勝です。現在、黒龍号を第二艦隊へ配置。アヅーラ前線へ進行させております。私は、本国で不穏な動きを感じましたゆえ、調査に戻りました。」
それを聞いて、リーディスは少々顔を曇らせた。だが、それも一瞬のことでしかなかった。
「不穏な動き？　そうか、それはお前に任せる。」
そう言われ、カルバンは「畏まりました」と頭を下げる。だが、リーディスは彼が頭を上げきらないうちに口を開いていた。その顔は歓喜に溢れている。
「それより、戦況は我が軍の優勢のようだな！　よくやった！　これでまた駒を一歩進められる！」
「えぇ、この調子で行けば、統治の日は近いですな。」
そう言うと、カルバンは目を細め、冷たく笑った。それを見たルフォールは背筋がぞくっとした。なんだ、あの男……まるで……戦争を楽しんでいるようだ…
「ところで、王。聞き耳立てるわけではなかったのですが……弟君は我々に対してあまり協力的ではありませんなぁ。」
そう言われ、ルフォールはムッとなり言い返した。
「無礼者！　私を誰と心得ての発言か！」
「……元……第二王子の……ルフォール様ですね。」
「え……」
「自己紹介が遅れましたな。私はカルバンと申します。この国の宰

相を務めております。お見知りおきを……」
　カルバンは深々と頭を下げた。リーディスが続ける。
「カルバンは父上が倒れられたときから世話になっている。父亡き後は、宰相として私の片腕となってくれているのだ。くっくっく……」
　リーディスは静かに微笑んだ。
「本当はお前を片腕にしようと思っていたのだが、くっくっく……お前よりいい働きをする。」
　彼は目をカッと開きながら、ルフォールに向かって言い放った。
「要するに、お前は用無し……ということになる……」
「用無し……？」
「私が王になった時点で、お前には王位継承権は存在しない。ただの弟というだけだ。その弟にせめての地位を与えたかったが、カルバンがいる。残念だったな。」
「それに、王。弟君はなにやら匂いますな。先ほどからの、王を否定する発言など…レジスタンスの輩と通じているのでは？」
「何？レジスタンス……ルフォール！貴様、まさかレジスタンスと連中と……」
　そう言われ、ルフォールはとっさに否定した。
「違います！私はそんな……レジスタンスなど……それに……」
　言い終わろうとしないうちに、カルバンに先手を打たれた。
「弟君がこの一ヶ月間音沙汰がなかったのは……レジスタンスと何か計画を練っておられたのでは…？最近何やら動きが怪しいと思っていましたが……なるほど……弟君がおられれば奴らも一層士気をあげますな。となれば、スカイ・バスでの事故はそれを隠す為のカムフラージュと言うことも考えられます。」
　カルバンの意見にもルフォールは諦めず否定する。
「違います！兄上！私は本当に事故に遭って…それに！今戻ったばかりなのです！」
　だが、リーディスは聞く耳持たずと言った態度でルフォールに迫

った。
「黙れ！まさか…弟にまで裏切られるとは…この怒り…ただでは治まらんぞ！ルフォール！今すぐお前は処刑だ！！衛兵！こやつを絞首台へ連れて行け！槍で滅多刺しにしてから首をくくってくれるわ！」
リーディスの命令とともに、ルフォールは両腕を衛兵に掴まれた。力任せに振りほどこうとしたが、衛兵の力は強くびくともしない。
「兄上！私の話を聞いてください！兄上！」
リーディスは玉座にどっかりと座り、喚き、叫ぶ弟を、まるで他人を見るかのような眼差しで眺めている。その様子を見ていたカルバンは、そっとリーディスの横に付き、なにやら耳打ちした。その様子は衛兵に引きずられているルフォールにも見えた。ふと、衛兵の手がゆるんだ。見ると、カルバンが合図を送っているようだ。カルバンが合図をしていた手を下ろすと、衛兵はルフォールから手を離した。すると、リーディスが口を開いた。
「ルフォール。貴様、考古学の博士号を取ったのか？」
咄嗟に聞かれ、ルフォールは返事ができず、「え？」と聞き返すのが精一杯だった。
「取ったのだな。そうか。そうすると、殺すとまずい。カルバンの調べでは、お前は相当な権威のようだな。そのお前を殺したとなると、他国からの圧力が厳しくなるやもしれん。処刑は中止だ。だが、王宮からは出さん。今日からお前の部屋は牢獄だ。そこで、死ぬまで私の政治を眺め、勉強に精を出すがいい。く…ははは！」
リーディスが言い終わると、ルフォールは再び衛兵に腕をつかまれ、ズルズルと玉座の間から引きずり出された。

第十章　カルバンという男

「しばし、お過ごしください。」
衛兵はそう言うと、ルフォールを牢の中へ押し込んだ。
「ちょっと待て！　ここから出してくれ！　兄上と話が……」
ルフォールの言葉を無視するかのように、衛兵は牢に鍵を閉め、去っていった。
「くそっ！」
ルフォールは悪態をつくと、牢の扉から離れた。何かいい手はないものか……ルフォールは何とかしてこの牢から出る方法を考えた。だが……何も浮かんで来ない。
「どうすればいい？」
ルフォールはしばらく暗い牢の中をうろうろと行ったり来たりを繰り返した。が、何もアイデアは浮かんでこないし、頭の中はごちゃごちゃになったままだ。ルフォールはしばらく頭を冷やそうと決め、寝具が広げっぱなしのベッドの上にドカッと座り込んだ。すると…
「ぐほ！！」
何やらうめき声が聞こえ、ルフォールは勢いよく何かに突き飛ばされた。
「誰じゃ！！　わしの腹の上に座り込んだのは！！？」
ベッドの中から長いひげを蓄えた老人が姿を現した。うす暗くて顔がよく分からないが、ルフォールには聞き覚えのある声だった。
「誰じゃ！！　どこにおる！？」
自分が見えていないのか……ルフォールは溜まらず聞き返した。
「もしかして、ロイド？　ロイド爺かい？」
ロイドと呼ばれた老人は、ルフォールの方へ向き直った。
「そ、その声…もしや、坊ちゃん…ルフォール坊ちゃんですかな？」
「やっぱり！　ロイド爺！！！　ロイド爺なんだね？」

「坊ちゃん！！」
この老人、代々エルシス王家に仕える一族の末裔で、この国の宰相を務めていたのである。ルフォールたちが幼いころは、政治の傍ら、教育係りとしても活躍していた、頼りがいのある存在だったのだ。だが、今目の前にいるロイドの風貌はすさみ、汚れ、かつての勇ましさは失われているかのように見える。
そんなことはおかまいなしに、ロイドはルフォールに抱きついた。どうやらむせび泣いているらしい。坊ちゃんと呼ぶときに嗚咽が混じる。二人とも、お互いの再会に喜んでいた。
「ロイド爺、久しぶりだね。僕がエイブラを出たとき以来だから……もう三年だね。」
「そうですとも！坊ちゃん、なんと逞しくなられたことか……先代がご存命ならば喜ばれたことでしょう……」
「ごめんよ……帰るのが一ヶ月も遅れてしまった……」
そう言うと、ルフォールはうなだれるようにうつむいた。
「この一ヶ月の間に、この国は大きく変わってしまったようだね……昔の面影もないよ……」
今度はルフォールが泣いている。無理も無いだろう。三年ぶりに祖国に戻ったのにこの有様だ。父は死に、兄も狂ったように周辺の諸国に戦争を仕掛けている。そのせいで国はすさみ、民は苦しんでいる。ルフォールの心は締め付けられるように痛めつけられていた。
「確かに、この国は変わりました。それも、カルバンという流れ者がこの国へやってきてからなのです。」
カルバンと言う言葉にルフォールが反応した。その目はひどくいらついている。
「カルバン……そうだ！　爺！　あのカルバンという男、一体何者なんだい？」
「……ご存知なのですか！？」
「ここに来る前、玉座で会ったんだ……あの男……聞かせてくれ！」

ロイドはウムと頷くと、静かに口を開いた。
「あれは一ヶ月前……先代が、坊ちゃんの事故をお聞きになって倒れられたときのことです。先代も、昔は強いお方でしたが、一年ほど前から体調を崩されておいででした……」
「兄上の言っておられた、はやり病か？」
ロイドは頷いた。
「そうですじゃ、国中にはやりましてな。この城の中でも死者が幾人か出ました。先代も一度意識が無くなったほどで御座いました。その間、兄上でいらっしゃるリーディス様が当面の指示をしておいででした。先代の体調がよろしくなった頃でしたかな。一度玉座にお座りになったのですが、坊ちゃんの悲報を聞き、倒れられたのです。」
「そうだったのか……」
今は亡き父の姿が目の前に浮かぶ。あんなに強かった父が病魔に犯されていたなんて……ルフォールはこの時だけ、国を出たことを後悔した。
「そんな折、あの男が姿を現したのです。」
「カルバンか……」
「はい……カルバンはリーディス様に先代を治すことができるのは自分だけだと言ったのです。それまで、先代をどんなに腕の立つ医者に見せても、医者はさじを投げました。リーディス様は一種の賭けに出たのでしょう。この男に見せるのを最後とするとおっしゃったのです。これで駄目なら諦めると……思えば、このときからリーディス様は少々おかしいと言いますか、我々の言うことには耳を貸さず、カルバンの言うことしかお聞きにならなかったのです。」
それを聞いたルフォールはピンときた。
「カルバンに……操られている……？」
「我らもそう思っていたところですじゃ。じょじょにですが、カルバンの権力が大きくなっていったのです。最初はリーディス様にくっついているだけでしたが、次第にリーディス様を差し置いて、自

分の意見を通すようになっていったのです。そして、ほぼカルバンが権力を握り占めた時……」
「父上が亡くなった……」
「お察しの通りです。その時すでにリーディス様は完全にあ奴に手の中のようでしたな。先代が亡くなれば、そのままリーディス様に王位が継承され、自然とカルバンが宰相になり、今の姿になったのです。そして、この国は戦乱に突入したのです。」
ルフォールは悲しみで一杯になってしまった。かつて、リーディスは、この平和を存続させたいと願っていた。自分も、兄の手伝いをしたいと思っていた。だが、現実は変わってしまった。今、この国は戦争をしている。これでは逆だ。歴代のエルシス家が願ってきたのは、周辺諸国との共存と平和である。無論、リーディスもそうだった。だが、一人の男の介入で歯車は大きくずれてしまった。この国だけではなく、オーバーアイルの歯車が……だ。
ルフォールは何とかしなければとつぶやいた。
「何とか……ここから出なければ……兄上と……話がしたい……」
「リーディス様との謁見は難しいですが、ここから出ることはできますぞ！」
「え……？」
ルフォールは聞き返した。
「坊ちゃん、国は変わりました。国民は怯え、苦しんでおります。我らはその姿をただ眺めることはできませなんだ。」
「どういうことだい？」
ルフォールの問いかけに、ロイドは鋭い目つきで応えた。
「我らは志しをともにする者たちを探し、呼びかけました。この国を救おうと……そして集まった者たちとともに、義勇軍『獅子の翼』を結成したのです！」
「ぎ、義勇軍！！？」
ルフォールは思わず声を張り上げた。慌てたロイドは、ベッドの寝具で自分もろともルフォールを包み込んだ。

「シー！　坊ちゃん、声が大きいですじゃ！」
「ご、ごめん……」
　ロイドはふーっとため息を漏らした。どうやら誰にも聞こえなかったらしい。衛兵が様子を見に来ることは無さそうだ。
「今はまだ小さい勢力ゆえ、奴らに知られてはまずいのです！！お気をつけあそばせ……！」
「……はい……」
　でも、カルバンは知っていたような……ルフォールはチラッと思った。
「だけど、爺。この牢からどうやって出るんだい？」
「心配めさるな、手は打って御座います。」
「……？」
「坊ちゃん、わしはわざと捕まったのです。全てはこの国を救う為、わしは密偵を買って出たのです。」
「密偵……」
「あのカルバンという男。謎が多すぎます。敵を知る為、わしはわざと王宮に忍び込みました。そして、調べられるだけのことを調べ仲間に知らせた後、脱出しようとしたのですが……へまをしましてな。みつかってしまいました。」
　ロイドは少々苦笑いを見せた。
「よく殺されなかったね……」
　ルフォールがそう言うと、ロイドは少々顔を歪ませた。
「リーディス様に助けられました。変わられましたが、まだ情が残っておいでだっだのでしょう。命まで奪う必要はないと、ここに入れられました。」
　ロイドは少々しゅんとしてしまった。無理も無い、リーディスとルフォールが幼い頃から仕え、世話をしてきたのだ。思い出も多い。恐らくルフォール以上にリーディスの変化の戸惑っているのは、このロイドなのかもしれない。ふと、ルフォールはそう思った。
「ですが、好都合でした。ここにいれば、襲撃の騒ぎに乗って脱出

も出来ますし、ここから反撃のチャンスもうかがえます。それにわしは仲間に知らせることもできたのです。次の満月の晩が、襲撃の時だと！」
「満月…」
ロイドは頷いた。
「どうやら、次の満月の晩にカルバンは王宮を空けるようなのです。前線に行くのでしょう。カルバンが居なければ、王宮などもぬけの殻も同然！　国を取り戻すことができるのです！」
だが、ルフォールの脳裏をあることがかすめる。ロイドはこう言ってはいるが、そうそううまく行くものではない。ルフォールはロイドに向き直った。
「そうしたら、兄上はどうなるんだい？　それに次の満月って……今日なんじゃ？」
「よくお分かりで！」
それを聞いたルフォールは全身から血の気が一気に引いていく感覚にとらわれた。
「駄目だよ、爺！襲撃は止めさせないと！」
「……？」
ロイドは不思議そうな顔をした。
「カルバンは義勇軍のことを知ってる！！　玉座で会ったとき、不穏な動きを察知して前線から戻ったって言ってたんだよ！！　奴は知っている……全て分かっているんだ！」
「…何と…」
ルフォールの言葉を聞いて、ロイドの顔は一気に雲行きが怪しくなった。そのときである。牢が揺れた。大きく、地震のように。
「な……なんだ……？」
ルフォールは立ち上がり、耳を澄ませた。遠くで爆発の音も聞こえてくる。ルフォールはロイドに向き直った。
「爺……これは……攻撃が始まったのかい……？」
ロイドは首を横に振った。

「え……？」
「違います、義勇軍にはこんな威力のある武器はそろっておりませぬ……」
「じゃぁ、一体何が……」
「分かりませぬ……」
ロイドはうつむいたまま動かなくなってしまった。
「爺……」
ルフォールもロイドの傍らに座りこんだ。爆発音は続いているが、二人の周りには沈黙が流れている。しばらく座り込んでいると、やがて爆発音は小さくなり始めた。遠くで人の声が聞こえる。避難を始めたのだろうか。それとも戦っているのだろうか。ルフォールがそんなことを考えていると、何やら牢の前が騒がしくなっていた。人の声だ。ガチャーンという音が鳴り響く。どうやら、牢の扉を壊しているらしい。また聞こえた。段々近づいてくる。気がつくと隣から聞こえた。いないぞ！次だ！男たちの声が響く。そして言葉どおり、ルフォール達のいる牢の扉が破壊された。
ガシャーン！！
目の前に扉が倒れこんできた。埃が勢いよくたつと、通路の明かりが牢の中を照らす。ルフォールは一瞬目がくらんだ。
「いたぞ！　ロイド爺だ！　なんだ……？　もう一人いる！！」
声が響いた。ロイドを知っているようだ。ロイドがゆっくり顔を上げた。
「お、お前たち……生きておったのか……」
ロイドは驚いていた。
「わしは、てっきり殺したかと……」
そこまで言うと、ロイドは顔をうつむかせ、泣き出した。それを見て一人の男が言った。
「何を言ってるんです！　ちゃんと生きてますよ！　さっ、行きましょう！　逃げるんです！急いで！」
そう言うと、数人の男がロイドの腕を掴み、引き起こした。

「さぁ、あなたも……ルフォール王子……」
「え……」
見ると、女性がそこに居た。確か、街で会った、バーバラという名前の人。
「また会うなんて、奇遇だね。さぁ！」
そう言って、バーバラはルフォールの手を掴み、引き起こすと走るよう促した。

第十一章　焼かれる街

ルフォールたちが閉じ込められていた牢獄は王宮の地下三階に位置していた。そこから階段で王宮の一階までは、並の兵士が全力で駆け上っても十分はかかるだろう。ルフォールたちは、そこを全力で駆け上っていたが、兵士の訓練を受けていないルフォールは皆から離れ気味になっていた。

「ほら！王子様、頑張りな！！」

バーバラが声をかけながら、彼の手を引いている。

「はぁはぁ…す…すいません…！」

「全く…こんな階段もまともに走れないんじゃ、『獅子の翼』には入れないよ！」

と言いつつ、彼女はルフォールに軽くウインクを投げた。

「キンバレー、一体何があったのじゃ？あのような攻撃力のある武器は、我々にはないはずじゃが…」

キンバレーと呼ばれた、体格のいい男は、背中に背負ったロイドから質問を投げかけられていた。

「そのことですが、今は脱出に集中したいのです！申し訳ありませんが…後ほど…」

そう言われると、ロイドは口をつぐんだ。

「もうすぐ王宮の一階です！急ぎましょう！」

先頭の男が、後を振り返り叫んだ。それを聞いて、皆は「おぉ！」小さく答えた。

「王子様！もうすぐだよ！」

バーバラはルフォールに話しかけるが、ルフォールはぜぇぜぇと喉を鳴らしていた。体力の限界だ。上に顔を向けると、外の光が上のほうから差し込んでいた。だが、何か変だ。戦闘をしている雰囲気ではないことはルフォールにも分かった。皆が光の中へ飛び込んでいく。ルフォールとバーバラもそれに続く。

王宮の一階に着いたルフォールは、ぜぇぜぇと息を切らしながら膝をついていた。肺が酸素を欲しがっているのがよく分かる。ルフォールも周りの様子を見回したかったが、呼吸を整えるのに精一杯だった。その代わり、周りの声はよく耳に入ってくる。

「早く逃げろ！！」

「外に出るんだ！」

「坊やがいないの！！」

「殺されるぞ！！！！」

人々の叫び声が聞こえる。それに混じって、どこからか爆発音が響いていた。

「王子様、大丈夫かい？」

話しかけるバーバラの方を振り向くと、ぼんやりだが視力が回復してきた。

「はい、なんとか…状況はどうなっているんですか？」

「…最悪だよ…」

そう言われ、うっすらと見える瞳を凝らすと、なにやら炎のようなものが見えた。そういえば、周りの空気も若干だが、熱くなっているのが分かる。

「バーバラ！ルフォール様は回復したのか？」

先ほどロイドを背負っていたキンバレーが話しかけてきた。

「もうすぐだよ、もうちょっと待って！」

「分かった」と言い、キンバレーは少し離れた。

「王子様…」

とバーバラが話しかけると、ルフォールは視力がほぼ回復してきたのか、辺りを見回していた。だが、目の前の光景が信じられないのか、何度も目をこすっている。

「そんな…王宮が…」

ルフォールの口からは絶望がこぼれていた。王宮の壁は破壊され、大きなひびが入っている所もある。辺りからは炎が溢れ、逃げ惑う人々の退路を塞いでいた。獅子の翼のメンバーだろうか、避難する

人々を誘導している。そのさまは、あまりの出来事に腰を抜かして座り込んでいる王宮の兵士より頼もしい。王宮の奥は燃え盛る炎が立ち上り、逃げ遅れたのか、人の叫び声や何か動物が焼け焦げるような匂いがした。それをかいだルフォールは一気に気分が悪くなり、その場に伏せこんでしまった。

「王子様！しっかりしな！」

「バーバラ！そんな奴ほっておけ！」

ルフォールが顔を上げると、そこには見覚えのある男が立っていた。

「フリンク！」

「王族なんか、置いてくればよかったんだ。死ねばこの国のためになるのに！」

「フリンク！」

バーバラの声は、絶叫に近かった。むせながら、ルフォールはバーバラに腕をかかえられ立ち上がった。

「ほら、しっかりおし。」

「…す…すいません…」

「ち！こんな光景、今に始まったことじゃない！お前の兄貴が戦争を始めてから、毎日がこうだったんだ！」

それを聞いたルフォールは、むせながら顔を伏せた。フリンクはまた「ち！」と悪態をついて、走り去っていった。

「許してやって。あいつは、リーディスが街に送り込んだハンターに自分の家族を目の前で殺されたんだ。そのせいでやっきになってるんだ。悪い奴じゃないんだよ…」

「分かってます…」

ルフォールは力なく答えた。そして、ルフォールとバーバラが歩き出したその時、

「来たぞー！！」

と言う叫びと共に、王宮の広間の壁がドーーーン！！という音と共に崩れ去った。その衝撃がルフォールたちを襲った！

「うわぁ！！」
「きゃー！！」
ルフォールたちは一瞬で壁際まで吹き飛ばされた。壁に叩きつけられた者もいたのか、うめき声も聞こえる。その光景をまじまじと眺めていると、あることに気付く。バーバラがいないのだ。
「バーバラさん！バーバラさん！！」
ルフォールが辺りを見回しても彼女の姿は無かった。ルフォールはもう一度叫んだ。
「バーバラさ…？」
言い終わらないうちに、ルフォールは強い力で突き飛ばされた。いや、違う。抱えられていた。見ると、フリンクがルフォールを抱えて走っているではないか。
「フ…フリンクさん…！」
大きな声で叫ぼうとしたら、フリンクはギロリとルフォールを睨んだ。
「でけぇ声出すな！あいつらに聞こえるぞ！」
「え…？」
そう言ってルフォールは後を振り返ると、信じられない光景がそこにはあった。
人が宙に浮いている…
それも二人！一人は赤黒い光なのか…風のようなものに包まれ、もう一人は金色に輝く風の中に漂っていた。二人とも見覚えがある。
「…カルバン…それに…」
ルフォールは信じられないといった感じで、その名を口にした。
「…ラカン…」
彼がそういった瞬間、二人は消えた。そして、辺りには先ほどの爆発音が響いている。
「ち！またおっぱじめやがった！！」
フリンクは舌打ちすると一気にスピードを上げた。
「ちょ…フリンクさん…バーバラさんたちはどうしたんですか…？」

「今それどころじゃねぇ！」
そう言うと、フリンクはどんどんスピードを上げ、あっという間に王宮から飛び出てきた。王宮のそとには、避難している人でごった返している。フリンクは叫んだ！
「みんな！俺について来い！アクロの丘まで行けば安心だ！」
フリンクがそう言うと、皆いっせいにフリンクの後について走り出した。中には王宮の兵士もいる。
…情けない…
それを見たルフォールは、そっとつぶやいた。と、フリンクが話しかける。
「王子様、目ぇつぶってろ！」
「え？」
「いいからつぶってやがれ！！」
「は…はい！」
言われた通り、ルフォールは目を閉じた。
「俺がいいって言うまでは絶対あけんなよ！」
フリンクはそう言うと、いっそう走るスピードを上げたようだった。

十分ほど経っただろうか、フリンクは立ち止まりルフォールを抱えていた腕を離すと「もういいぜ」と言った。地面に下ろされたルフォールはそっと目を開けた。そして、あごで後を見ろと合図するフリンクに促され振り返ると、そこには見たことも無い光景が広がっている。逃げ惑う人々、なおも続いている爆発…そして、燃え盛る炎は王宮とエイブラの街を飲み込み、夜空を紅く焦がし続けている。それを見たルフォールは思わずつぶやいた。
「…紅蓮…戦争…」
炎が街を…いや、一つの国を飲み込もうとしていた。それは、千年前に起こった、世界を焼き払った戦いを再現しているようだ。ルフォールはその場にへたへたと座り込んでしまった。その地獄のよ

うな光景に、全身の力が抜けてしまったようだ。
「ち！こうしちゃいられねぇ。おい、王子様！ひとまず逃げるぞ！ついてきな！」
だが、ルフォールの耳に、彼の声は届いていなかった。まるで立ち上がろうとしない。魂が抜けてしまったようだ。
「ち…世話が焼けるぜ…」
そう言うと、フリンクはルフォールを抱えて、眠りの森へと入っていった。

第十二章　愛しき死

フリンクに背負われたルフォールは、そのまま「眠りの森」の奥深く、崩れた城壁の門らしき場所をくぐって行った。そこは、恐らく千年前に失われた古代エイブラの象徴「エレドア城」であることは、ルフォールにもすぐに分かった。

そうか…僕はここの手前に送られたのか…

この城門をくぐる前に、あの転送カプセルがあった小屋（？）を見たのだ。

千年前の城…どんな姿をしていたのだろうか…

フリンクの背中に揺られながら、ルフォールは浮かんでくる疑問を頭の中で繰り返していた。

あのカルバンと言う男…一体何者なのか…何故あんな力を持っているのだろうか…そして…あの金色の風の中にいたのは…

「…ラカン…」

ルフォールは、フリンクの背中でつぶやいた。

「ん？何か言ったか？王子様。」

走りながら、フリンクが振り向く。

「いいえ、何も…」

そう言いながら、ルフォールは背中で丸くうずくまってしまった。それを見て、フリンクは少し気を落としたように前を向いた。

「もうすぐアジトだ。それまで揺れるが、辛抱してくれや。」

だが、ルフォールからの返事は無かった。

しばらく走り続けただろうか、急に周りが暗くなったことにルフォールは気がついた。フリンクも走るのを止めている。ルフォールは頭を上げた。

「…あぁ…」

思わず声を上げたルフォールに、フリンクは悪戯っぽく笑って答

えた。
「凄ぇだろ。何でも、ここは千年前に作られた時のまんまで残されてたらしい。見つけた時はそりゃぁ…」
フリンクが言い終わらないうちに、ルフォールは彼の背中から滑るように降りて上を見上げた。いや、見入っていた。
「おい…人の話聞いてんのかよ…」
「凄いはずですよ…まさか、エイブラにこんな物があったなんて…」
見上げながらルフォールは答えた。
「??」
「これは、オーバーアイルの記念碑です。」
フリンクは目を丸くした。確かに、言われてみればそれは石碑のようではあるが…しかし、フリンクは見ただけでは分からなかった。
「き、記念碑?」
「ええ、この大陸達が重力を離れ、オーバーアイルとしてこの空に君臨することを記念して造られた…いわば、オーバーアイルの始まりを記した物です。紅蓮戦争で失われたと思っていたのに…」
一人見入っているルフォールに、後ろから声を掛ける者がいた。
「それこそが、エルシス王家…いや、エイブラが守り続けた物でございます。」
ルフォールが声のした方へ振り返ると、そこには見慣れた老人が立っていた。
「ロイド…」
「坊ちゃん、この石碑こそが、エイブラが…歴代の王達が守り抜いてきた、オーバーアイルの宝ですじゃ。」
ロイドはそう言い放った。
「ここは、旧エイブラが誇った『エレドア城』の地下。アクロ地下宮殿にございます。ここには様々な歴史が眠っておりましてな。ミッシング・ミレニアムについての記述も、わずかですが残されておりますじゃ。」
ミッシング・ミレニアムと言う言葉に、ルフォールは強く反応し

た。突端に目が鋭くなったのが、フリンクにも分かった。
「ロイド！何故知っている！？」
「何が…？でございますかな？」
ロイドの言い方に、ルフォールは苛立ちを感じた。
「ミッシング・ミレニアムのことだ！いや、それだけじゃない。この地下宮殿のことも…記念碑のことも…この記念碑は、他国では完全な形では残されていないんだ。大概、かけらか、あったとされる遺跡しか残されていない…こんなもの、他の国が知ればそれこそ…」
戦争になる…そう言いそうになって、ルフォールは口をつぐんだ。今、この国は他国を相手に戦争をしている。そのせいで、民が苦しんでいる。その現実がルフォールの心に突き刺さる。そんなルフォールを見て、ロイドはにっこり笑って話題を変えた。
「まぁ、またいずれお話致しましょう。今はゆっくりお休み下され。坊ちゃんが来られると聞いていたので部屋を用意しました。フリンクも…」
フリンクを見て、ロイドはあることに気がついた。
「フリンク、バーバラはどうした？」
そう聞いて、ルフォールもフリンクの方を見た。
「そうです！バーバラさんは…？」
バーバラのことを聞かれて、フリンクは視線を足元に落とした。いや、少々戸惑っている。あきらかに彼女の身に何かあったことが、ロイドにはすぐ分かった。
「フリンク…」
「バーバラは…死んだ…」
衝撃が二人を突き抜ける。
「え…？」
「今…何と…」
フリンクは戸惑いながらも続けた。
「王子様、あんた牢から脱出したあと、一階であの化け物共が壁をぶち破った時、吹き飛ばされただろ…」

そう言われ、ルフォールは静かに頷いた。
「あん時、あそこにいたほとんどの奴らが壁に叩きつけられた。俺は伏せてたから良かったが…バーバラはな、あんたが壁にぶち当たる瞬間、あんたの後ろに入ったんだ。そして、あんたのクッションになった…」
ルフォールはただ黙っていた。ロイドは、目を伏せながら彼に尋ねた。
「そして…そして、どうなった？」
「ぺっちゃんこさ…爆風の衝撃と、あんたの体重を受けたんだ。壁に当たったときは、他の奴の二倍の衝撃だ。俺が駆けつけたとき、バーバラは…即死だった。それを見せちゃいけねぇと思って、俺はあんたを抱えて走ったんだ。」
ルフォールの目には涙が溜められていた。とめどなく溢れ、流れ落ちていく。
…自分のために一人死んだ…
それは、ルフォールにとっては耐え難いことだった。自分のために他人が死ぬなど、考えられないことだったのだ。ルフォールは、たまらず嗚咽を漏らしていた。
「う…うっ…うう…」
それを見たフリンクは、決まりが悪そうに「避難してる奴らを見てくる」と言って、その場を離れた。膝を突いて泣き崩れるルフォールに、ロイドは優しく詰め寄った。
「坊ちゃん、あまり悲しまんで下され。バーバラが哀れじゃ。」
そう言われ、ルフォールは顔を上げた。
「たった一人の残された王家の血筋を守ったのです。どうか、悲しむのではなく、褒めてやってくだされ。よくやった、勇敢だったと…それで、バーバラも報われましょう。」
ロイドはにっこり微笑んだ。それを見て、ルフォールはまた泣き出した。嗚咽が辺りに漏れる。
「さぁ、お立ち下され！部屋を用意してございます。そこで、今は

ゆっくりお休み下さい！この戦が終わったら、坊ちゃんにはしっかり働いてもらわんとなりませぬ！」

そう言い、笑いながらロイドはルフォールの腕を引いた。立ち上がると、ルフォールは近くにいた男たちに手を引かれトボトボと歩み出した。

その後姿を見送りながら、ロイドは小さな声で囁いた。その顔には涙が溢れている。

「褒めてやってくだされ…わが…孫娘を…」

第十三章　再会と別れと…

部屋に入ったルフォールはそのままベッドに倒れこんだ。
真っ暗な部屋……どこに何があるのかも分からないが、ベッドだけは分かった。窓際のほうにドンと置いてあったのだ。取替えたばかりだろうか、マットがとても気持ちいい。思わず「ふぅ……」とため息をついてしまう。
思い返せば、大変な一日だった。まさか、エイブラに帰ってきてこんなことになろうとは…
ルフォールは、肉体的にも精神的にも疲れきっていた。そのせいか、強い睡魔に襲われ、意識は次第に薄くなっていった。

どれくらい経ったのだろうか。ルフォールは、ドアの向こうの騒がしさで目を覚ました。なにやら声が聞こえる。それも大勢の声だ。ルフォールは体を起こし、ベッドから降りると、多少ふらつきながらもドアの近くまで行った。そしてドアに耳を当てると、少しだが会話らしきものを聞き取ることができた。
……殺してしまえ！
……お前のせいで……
何だか物騒なことを言っている。ルフォールは、今度は耳を澄まして集中した。。
……こいつが……
全て……街も……
……殺してしまえ！
……リーディス！！
「リーディス？　……兄上！！」
兄の名を聞いた途端、ルフォールは勢いよくドアを開けた。すると、さっきよりもみんなの声がよく聞こえる。左の方からのようだ。そちらに目を向けると、廊下の先から光が漏れている。ルフォール

は、その光に向かって一目散に駆け出した。
　ルフォールが声のするほうまでたどり着くと、そこは街を追われた難民たちでいっぱいになっていた。みんなが罵声を飛ばしている。すごい熱気だ。みんな、よほど興奮しているのだろう。これでは、とても前の方には行けそうもない。ルフォールは背伸びをして、周りを見渡した。前の方がよく見えないが、しきりに数人の腕が上がるのが見える。本能的に、ルフォールはそこに兄がいることを悟った。
「兄上！！」
　ルフォールは叫びながら群衆の中に入り込んだ。人を掻き分けながら進んでいるのに、誰もルフォールに気がつかないのか、顔や腹に膝蹴りや肘打ちを喰らってしまった。一発は、みぞおちに入って倒れそうになったが、何とか持ち直し、人を掻き分け続ける。
　やっとの思いで先頭までたどり着くと、目の前に床に寝そべっている男がいた。兄である。なんと変わり果てた姿だろう。顔は黒くすすに覆われ、着ている服はところどころちぎられている。手足からは血が流れ、ハァハァという息はとても荒い。その姿を見たルフォールは、その場に立っているだけでやっとだった。さっきまで罵声を浴びせていた者たちも、いきなり前に現れた男がルフォールと気が付いたのか、その姿を見て静かになった。みんな、静まり返ってしまった。
「兄上……」
　ルフォールが静かにつぶやいて近づこうとすると、長い木の棒を持った男がそれを止めた。
「あんた……ルフォール様か。何をする気だ？」
　その目つきに圧倒されながらも、ルフォールははっきりとした口調で言い返す。
「兄に聞きたいことがあるんです。駄目ですか……？」
　それを聞いた男は、目の色を変えてルフォールに迫った。
「そんなこと言って、こいつを助けるつもりじゃねぇだろうな！？」

「……え？」
男がそう言った途端、周りも同調したかのように再び罵声を始めた。その場の空気に圧倒されたのか、ルフォールは縮こまってしまう。しかし、そんなことはおかまいないしと言った感じで、男はルフォールに詰め寄った。
「こいつは、この国を……俺達の生活を奪ったんだ！　奪った上に、めちゃくちゃにしやがった！！　そんな奴は生かしちゃおけねぇ！」
男はそう言うとリーディスに視線を戻した。
「本当なら、あんただって生かしちゃおけねぇ！！王族なんか……エルシス家なんざ、いなくなりゃいいんだ！！」
そうつぶやき、男は手に持った棒を頭上に突き出し、みんなに聞こえるように叫んだ。
「王族は殺せー！！」
男が叫ぶと、周りもならって「殺せ！　殺せ！」と叫びだした。もはや収拾つかぬ状態だ。だが、ルフォールは男の前に立ちはだかった。
「……何の真似だ？」
「あなた達が兄を殺したい気持ちは良く分かります。でも、そんなことして何になるんですか？　兄を殺したところで……もう、この国は元には戻りません！　あの、カルバンがいるかぎりは……」
男は黙ってルフォールを睨み続けている。
「あなた達が兄を殺したら……それこそ、兄と同じですよ！　無抵抗の人間を殺すなんて…」
「それがどうした！！？」
男の叫びに、ルフォールは一瞬体がすくんだ。
「それがどうしたってんだ！　いいか、この国はな！　てめぇの兄貴が好き勝手してこんなにしちまったんだ！　その報いはして当然なんだ！　兄貴を殺したら、同じになるぅ？　はっ！そんなこと、分かってて当然だよ！　でも、やらなきゃならねぇんだ！　俺たちもけじめをつける必要がある！　例えそれが最低なことでもな！」

そう言って、男はルフォールを横に跳ね飛ばした。
「邪魔するなら、ルフォール様。あんたも殺すぜ！」
男はそう言うと、リーディスの側まで詰め寄った。そして、腰から拳銃を抜き出すと、リーディスの心臓に銃口を向けた。
「リーディス！　てめぇの死刑執行だ！　甘んじて受け止めな！」
男がそう言って引き金を引こうとしたその時、奥から「止めぬか！」と声が聞こえた。皆が声のした方向を振り向くと、そこにはロイドが立っていた。
「ロイド……」
ルフォールもロイドの方へ視線を向けていた。ロイドは静かにリーディスの側まで近づた。
「ロイド爺！　なんで止めるんだ！？　こいつは……」
「黙らぬか……」
そう言われ、男は猫のように丸くなってしまった。いや、男だけではない。先ほどまで血気盛んだった群衆も静かになってしまった。それを見て、ロイドは静かに膝を突き、リーディスに話しかる。
「リーディス様……お気を確かに……」
すると、リーディスもかすかだが目を開けた。だが、その意識は消えつつあるようだ。
「……ロ……ロイ……ド」
「お久しゅうございます……」
ロイドは静かに頭をたれた。
「ル、ルフォールは……」
「おわしますよ」
喉から搾り出すような声で聞くリーディスにそう言って、ロイドはルフォールを手招きした。ルフォールも側まで来て膝をついた。
「兄上！」
「……ルフォール……すまぬ……」
「兄上！！」
そう言って、ルフォールはリーディスの手を握った。その手には、

もう力は残されていなかった。
「ルフォール、気をつけよ……カルバンは……」
そこまで言うと、リーディスは咳き込みながら血を吐き出した。赤黒い血だ。恐らく内臓をやられているのだろう。それを見たロイドは「医者を……」と叫んだ。
「兄上！もう何も話されますな！今は体を休めることを…」
「む……無駄だ……もう……死ぬ……」
そう言って、またゴホゴホと血の混じった咳をした。
「兄上！！」
「ルフォール……聞け！」
リーディスは目を閉じると、静かに語り始める。
一ヶ月前、ルフォールの乗ったスカイ・バスの事故の後に先代は倒れたこと。
そして、カルバンという男がこの国に現れ、リーディスに取り入ってきたこと。
半月も経たないうちに、リーディスの精神はカルバンに乗っ取られ、次第にカルバンの言いなりになっていったこと。
リーディスはカルバンに洗脳されていたのだ。リーディスは、自分の意思に逆らう体をなんとか押さえつけようとしたが、その抵抗は空しく、やがて、正常な思考もなくなっていったという。リーディスは、話終えると、目を開きルフォールを見た。
「ルフォール……立派になった……な……父上が生きておられれば……私は……間違って……いた……カルバンに踊ら……された……」
リーディスの目から、涙が溢れる。そして、握っていた手の力がどんどん抜けていく。
「あ……兄上！！」
「すまぬ……」
そう言いながら、リーディスは静かに目を閉じた。
「あ……兄上」
ルフォールは、リーディスの体を揺さぶった。だが、何も反応が

無い。
「兄上ぇぇぇ！！！」
ルフォールの叫びが辺りにこだました。涙がルフォールの頬を伝わり、リーディスのすすにまみれた顔に落ちた。そこだけが涙で洗われ、白い肌が姿を見せる。
「フリンク、キンバレー。」
ロイドは二人を呼んだ。
「リーディス様を手厚く葬って差し上げろ。曲がりなりにも十七代を務め上げたお方だ。」
ロイドにそう言われ、二人は一旦その場から消えた。そして、担架を持って現れると、リーディスの亡骸をそれに乗せてゆっくりと運び出す。
ルフォールはいつまでも泣きじゃくっていた。それを見たロイドは、「坊ちゃん……」と言い、肩に手を乗せた。
掛ける言葉が無い。いや、たとえあったとしても、どう話しかければよいものか……ただ、肩に手を置くだけで、ロイドは精一杯だった。二人を静寂が包んでいたとき、
「先生―！！」
と誰かが叫ぶ声がした。どうやら怪我をした者がいるようだ。医者を探しているのだろう。
「先生はこっちにいるぜ！！」
また誰かが答えると、担架を持った二人組が人ごみを掻き分けながら中央まで現れた。
「助かった！　王宮で生き残りを探してたら、瓦礫の中から女の子を見つけてよ！　まだ息があるから先生に診てもらおうと思って連れて来たんだ！」
そう言って二人組は静かに担架を降ろした。見ると、血だらけでボロボロになっている女の子が横たわっていた。周囲から「かわいそうに」「逃げ遅れたのか」など、どよめきが起こる。
しばらくすると、白衣の医者ががちゃがちゃと道具の入ったカバ

ンをさげて現れ、女の子の側に膝をつくと診察を始めた。
「誰か、タオルを！！」
そう医者が叫ぶ。みな、医者の指示にてんてこまいになっているなか、ふとルフォールが顔を上げると、目の前にバケツに放り込まれたタオルがあった。
汚れてるかもしれないけど…
そう思いながら、ルフォールはそれを持ってヨロヨロと立ち上がると、医者のところまで持って行った。そして、医者にタオルを渡すと、おもむろに担架の中を覗き込んだ。そこには、見覚えのある顔の女の子が寝そべっている。ルフォールは自分の目を疑った。そこには、孤島で別れ、王宮で化け物と戦っていた少女がいたのだ。
ルフォールは思わずつぶやいた。
「ラカン…」

第十四章　アルケードとロイド

医務室に運ばれたラカンは、すぐに医師によって手当てがされた。幸い、命に別状は無く、意識が戻らないのは頭を強く打ったための脳震盪で、時間が経てば戻るだろうとのことである。

「そうか……よかった。」

ロイドから様子を聞いたルフォールは、胸を撫で下ろした。ほっとしたのか、その場に座り込んでしまう。まだ、疲れが残っているようである。彼女もそうだが、ルフォールも疲れきっている。ここに逃げ込んでいる全員も同じだ。

「坊ちゃんも隅に置けませんな。あのような知り合いがいるとは……」

ロイドが微笑んだ。

「そんなじゃないよ。彼女には命を救われただけさ。」

そう言いながら、ルフォールはラカンに再び会えたことが嬉しかった。だが、こんな状況だ。果たして喜んでいいものか……戸惑うルフォールに、ロイドが言い寄った。

「坊ちゃん。少しお付き合い願えますかな？」

「え？」

ロイドは、そう言うとすたすたと歩き出した。

「ちょ……じい！　待ってよ！！」

ルフォールは、ロイドの後を追いかけた。

ロイドは、齢八十に近い老人だ。足腰も弱り、体力も少ないはずなのに、後を追いかけるルフォールは時折置いていかれそうになる。しかも、歩いている通路は薄暗い。よく壁に当たらないものだ。

「じい！　ロイド！　どこまで行くんだい？」

ルフォールの声が聞こえているのかいないのか……

ロイドはひたすら歩き続ける。

「ロイド！」
すると、ロイドはふっと消えた。消えたというよりはいなくなった……というほうが早い。ルフォールは驚いて走り出した。
「ロイド！　どこに行ったんだい！？」
通路が薄暗い中、道なりに進んでいくと曲がり角が出てきた。そこを曲がると、目の前にはロイドの背中がルフォールを待っていた。
「……じい、置いてくなよ……」
ルフォールは、息も途切れ途切れになっている。そんなルフォールには目もくれず、ロイドは静かに口を開いた。
「オン・マクナ・ドナ・メグラ・ピドス・ラム……」
そういうと、暗闇の向こうから何か音が聞こえる。
「ロイド……その言葉……？」
「中へお入りください……坊ちゃん。」
そう促され、ルフォールは戸惑いながらもゆっくりと前に進み出た。そして、ロイドの傍らに並ぶとロイドはまた口を開いた。
「エクセオンデマス・ソト・マヌラ！」
そう言うと辺りに光が灯された。
目の前は部屋だった。椅子が並び、机が並び……部屋の中央には巨大な球体が佇んでいる。
ルフォールはこの風景に見覚えがあった。地上の海に漂う孤島……そこにあった過去の遺産……ルフォールが口にしようとした言葉を、ロイドは言った。
「ここは……知識の間ですじゃ。」
そう言いながらロイドは目の前の机に進み、何かの操作を始めた。その机は恐らく、この部屋の制御装置だろう。一通りの操作をすると、中央の球体から色々な情報が飛び出してきた。地上の島よりも洗練された装置のようだ。ルフォールはそう思った。
「地上の島にも……このような装置がございませんでしたか？」
ふいにロイドが話しかけてきたことに、ルフォールは多少びくついてしまったが、落ち着いて返事をした。

「あ……あったよ……ここのよりはちょっと古そうだったけど……」
「あの島は、元々はこのエイブラよりも設計がふるいものですじゃ。しかし、まだ動いていたとは……古代の科学力はとてつもないですなぁ。」
そう言って、ロイドは再び操作を始めた。球体からはラカンに関する記述が飛び出してきた。ルフォールはそれを食いつくように見つめる。
……違う……
ルフォールはロイドに尋ねた。
「ロイド。ここにあるラカンのデータだけど……地上で見たのとは若干違うんだ……」
「どう違いますかな？」
「うん、新しいんだ。地上で見たのとは違って……新しいんだよ……」
ロイドは一旦手を止めると、ルフォールの方へ向き直った。
「坊ちゃん、地上の島でアルケードという犬に会いませんでしたか？」
アルケード……地上でいつもラカンにくっついていた犬だ。もちろん、ルフォールは覚えていた。いつも吼えられていたからだ……
「いた！　いたよ。生意気なあの犬……」
しかし、ルフォールは合点がいかなかった。何故、天空にいるロイドが、地上の島にいる犬のことを知っているのだろうか？　それはロイドが答えてくれた。
「彼は……我ら一族の先祖ですじゃ……」
「え……？」
ルフォールは驚いた。あの犬が、ロイドの一族の祖先だというのだ。さすがのルフォールも、これには驚いた。いや……頭が混乱している。
「あれ……犬だよ？　犬がご先祖……？」
ルフォールは頭を抱えてしまった。

「不思議なことではありますが、間違いはございません。彼の名は、アルケード・コンタス。千年前のエルシス三世のときより、この世を生きてございます。」
「……犬が千年……」
ルフォールは頭がこんがらがってきた。普通、犬が千年も生きるはずがない。ありえないことだ。だが、実際アルケードは千年前から生きている。だが、ロイドはお構いなしに続ける。
「彼…アルケードは、千年前の紅蓮戦争で瀕死の重傷をおったのです。そのとき、彼はボロボロになった自分の体を捨て、犬の姿をしたマータと呼ばれる機械の体に自分の意識を移し変えたのですじゃ。」
「機械の体に意識を……そんなことが……」
ロイドはうなづいた。
「可能だったようですな。そして、彼は千年もの間、この島の、この部屋まで常に情報を送ってくれていたのです。今日までラカンの情報があるのは、全て彼女と生活していた彼のおかげですじゃ。」
「そのこと…兄上は知っていたのかい？」
ルフォールの問いかけに、ロイドは首を左右に振った。
「リーディス様にはお伝えしませなんだ。カルバンがいましたからな。アルケードのことはもちろん、ここも含め、全て秘密厳守なのです。正式に王位を継いだ方のみにお伝えしてきました。無論、先代はご存知です。王位につき、確実に務められる方のみに伝えよ……と代々言い聞かせられてきましたからな。」
「そうか……ロイドの一族はずっと僕たちを見守っていてくれたんだね。」
「それが、我が一族の務めでしたからな。」
ロイドはにっこり微笑んだ。この老人は本当に良い笑顔を出す。ルフォールも、この笑顔に幾度となく救われてきた。今もだ。なんだか、とても安心する。それが、この老人の雰囲気からなのかもしれないが、彼はルフォールにとっては無くてはならない存在だ。ル

フォールは確信していた。
「さ、坊ちゃん。もうすぐ夜明けです。お部屋へお戻りください。お体を休めなければ！」
そう言って、ロイドは出口へとルフォールを促した。
「最後に教えてくれないか？　アルケードはここに情報を送っていたんだよね？」
「……」
ロイドはルフォールの問いかけに黙ってしまった。しかし、ルフォールは構わず続ける。
「彼が情報を送れるんだとしたら……僕が生きているってことを……知らせることもできたんだよね？」
「……」
ロイドは沈黙を続けたままだ。ルフォールもさすがに苛立ち、声を少し荒げて押し迫った。
「ロイド……！　何とか言ってくれ！」
すると、ロイドは重く閉ざした口をゆっくりと開いた。
「残念ですが、……それはできませぬ……」
「何だって？」
ロイドは、ルフォールを見た。その顔は、いつものロイドではない。しいていえば、長く閉ざされた、触れてはならない物に触れるような……困惑した顔に見える。ルフォールが「どういうことだ？」と言うのと重なるように、ロイドは話し始めた。
「アルケードは、このエイブラを去るとき、時の王エルシス三世にこう申したそうです。『ラカンと生活を共にし、彼女の情報は送るが、それ以外のことはしない』……と……」
ロイドは続けた。
千年前、後に伝えられる紅蓮戦争は、ラカンだけではなく、いくつもの因果が重なり、ラカンを媒体にして引き起こされたという。そこに、アルケード自身も絡んでいたのだ。彼は、ラカンを地上の孤島に幽閉する際、自分にも責任があるということで、自らの体を

捨て、機械の体に意識を移し、永遠ともいえる時の流れを生きることに決めた。それは同時に、彼女を終始監視する役目でもあることを意味する。

「じゃぁ、彼は……」

ロイドはうなずいた。

「自らその役を買って出たそうですじゃ。そして、エルシス三世にそう告げた。我ら一族ではこう伝えられておりました。」

ロイドの話は、ルフォールにとってとても興味深かった。紅蓮戦争の原因がまた一つ明かされたが、それは悲しい事実の上に成り立っている。戦争というものは、始まりも終わりも、人の心を常に蝕んでいるようにルフォールは感じた。

千年前の戦争以来、この大陸の文明は大きく衰退したといえよう。だが、それは人々が犯した間違いを修復する為の時間だとしたら、考えようによっては、短い時間なのかもしれない。ラカンとアルケードの存在はまさにそれを物語っているのではないだろうか。現に、ラカンは未だに苦しんでいる。たとえ時間が過ぎようとも、心に負った傷は回復しないのだ。その姿を見れば、よく分かる。

ルフォールがそんなことを考えていると、ロイドが割って入ってきた。

「さて、わしはまだ仕事がありますじゃ。避難民の誘導。カルバンの対策……やることはまだまだありますのでな。これで戻ります。坊ちゃんはいかがなされますかな？部屋へお戻りになられますか？」

「いや……」

ルフォールはしばらく、考え込むが、すぐに決めた。というか、すでに口に出ていた。

「僕はラカンの側にいるよ。目が覚めたとき、知らない場所っていうのは不安だし……知り合いがいればきっと安心だと思うんだ。」

これはルフォールにもいえたことだった。彼が、地上の島で目覚めたとき、知らない場所というだけで、とても不安になった。彼女もきっとそうなるかも……と考えたのだ。ルフォールは「いいかな

？」とロイドに再度聞いた。ロイドもしばらく考え込むが、すぐに答えは返ってきた。
「よろしいでしょう。ドクターにはわしから言っておきます。坊ちゃんがおられれば、彼女が目を覚ましたときも安心でしょう。」
そう言われ、ルフォールは思わず微笑んだ。嬉しいとき、自然と笑顔が出るものだが、これがそうだろう。ルフォールは「ありがとう！」と言って、知識の間を躍り出し、そのままラカンの部屋目指して駆け出した。

第十五章　二つの心

ロイドたち義勇軍「獅子の翼」が根城にしているアクロ地下宮殿は、アクロの丘の地下に存在している。とは言っても、丘陵の中にある建造物なので完全な地下とは言いがたいが……かつて旧エレドア城が丘の上には聳え立っていたが、紅蓮戦争によって城は完全に破壊されている。しかし、この宮殿は丘陵の中にあったため破壊は免れたのだ。しかも、この丘陵が強固な外壁となっており、この地下宮殿は要塞の役割も担っていたのである。内部は非常に複雑で、よっぽど熟知した案内人がいなければまず生きては出られないだろう。

この地下宮殿の道を知っているものは非常に少なく、今ではロイドの一族だけである。かつては王家の者にも伝えられていたが、知っていてもここを訪れることは少なく、次第に伝承されなくなったという。代わりに、ロイドの一族だけが代々伝えられてきた。

ルフォールが知らなくて当然なのだ。

知る必要がなかったのだから……

この地下宮殿は、名前に「地下」が付いてはいるが、先も述べたとおり完全な地下ではない。そのため、窓の設置された部屋がいくつか存在する。しかし、正面からは絶対に見ることのできない位置にある。

アクロの丘の裏側には、「海」と呼ばれる大空が存在している。窓のある部屋は、その「海」の方向に存在するのだ。

断崖絶壁の切り立った斜面に窓はあるのだが、ここから敵に攻められる心配はない。なぜなら、この絶壁には隠れる場所はおろか、手や足をかける凹凸すらないのである。それに、例え登れたとしても、上に登るにしたがってだんだんと外側に向かって斜面は伸びて

いる。途中で耐え切れず下に落ちるのは間違いないだろう。落ちた先には森などはない。地上に通じる大穴が口を開けて待っている。

そういった場所だから、窓を作ることができたのだ。ここから朝日を拝むこともできるし、空気の入れ替えもできる。そして、絶壁に守られ、侵入者は仕方なく正面から入り、中の迷路に導かれ息絶える。

まさしく難攻不落の要塞だ。

その要塞の廊下を、ルフォールは走り続けている。目指すのはラカンのいる部屋だ。彼女の部屋は、この窓が設置されている部屋のひとつだ。場所はロイドから聞いてある。あとは部屋の前まで行ってノックをするだけなのだが、いざ部屋が近づくと、ルフォールの緊張は一気に高まった。

何を話そう……

彼は見てしまったのだ。彼女の正体を。

いや、正体と言えるかどうかはまだ分からない。彼女から聞いたわけではないし、一度しか見ていない。もしかしたら他人の空似とも思えるが、彼には確信がなかった。

走りながら、彼女の顔が脳裏をよぎる。

あの島で見せた彼女の笑顔が忘れられなかった。

そして、最後の涙……

そんなことを考えていると、いつの間にか部屋を通り過ぎてしまいそうになった。

「おっとっと……」

ルフォールは少しバックしてドアの前に立った。

心臓の鼓動が早くなる。口から飛び出してしまいそうだ。

ルフォールは深く息を吸い込むと、胸の音が大きくなるのを聞きながらドアをノックした。

コンコン……

しばらく待つが応答がない。ルフォールはもう一度叩いた。しかし、反応は返ってこない。

ルフォールは少々がっくりしながら腕を組んだ。なんだか、今まで考えていたことが急に馬鹿らしく思えてきたのである。せっかくの再会なのだ。気楽に行こう。そう仕切りなおして、彼は思い切ってドアを開けた。

「ラカン。いるのかい？」

ドアをいっぱいに広げると、部屋の中から木漏れ日のような光が差し込んできた。ルフォールは思わず目がくらんでしまった。さっきまで薄暗い廊下にいたせいで、そっちに目が慣れていたのだ。しかし、そんなに強い光ではなかったのだろう。少し時間が経てば少しずつだが、景色は見えてきたのだ。

……クスクス……

笑い声がする。ルフォールはようやく慣れた目で声の主を確認した。

彼の視線の先には、ベッドに腰掛け、窓の方に体を向けている少女がいる。窓からは夜明けだろうか。朝日がいっぱいに溢れていた。彼女は光に埋もれているのだ。

ルフォールはしばらく見とれていた。美しい光景だった。

少女が不思議そうな顔をして尋ねる。

「ルフォール、どうしたの？」

そう言われ、ルフォールははっと我に返った。一瞬だったが、夢を見ていたようだった。彼女がまた笑う。

「どうしたの？」

ルフォールは口を開くと、ベッドの傍らに置いてある椅子に腰掛けて良いか尋ねると、彼女は快く承諾してくれた。ルフォールが椅子に腰掛けるのを見届けると、ラカンは彼の方を眺めながらしゃべりだした。

「夢を見たの」

「……夢？」

ルフォールは聞き返す。彼女はそっと頷いた。

「長い長い暗闇が続いているの。そこを、いつまでも歩き続けたわ。

そうしたら、遠くで声が聞こえるの。泣き声だった。とても切なくて、悲しそうで……聞いているだけで、私の胸がきゅっとなったの。気がついたら走っていたの。声のする方へ、ひたすら……するとね、向こう側が明るくなってきたの。あ、きっとこの先にいるんだって思って暗闇を飛び出したら……」

ラカンはそこで一呼吸置いた。

「……炎でいっぱいだった……」

ルフォールの目が細くなった。いや、鋭くなったと言うべきだろうか。彼女の顔は、少々蒼く、ベッドの上で繋いでいる両手も小刻みに震えている。ルフォールが「大丈夫かい？」と声をかけようとすると、彼女はまた話し始めた。

「……怖かったわ。とても……でも、泣いている人はもっと怖いんだ、早く行かなきゃって思うと、自然と炎の中に入れたの。」

ラカンの見た夢は、恐らく紅蓮戦争の最中だろう。炎の中を進むと、逃げ惑う人々や避難を促す人を見たそうだ。だが、皆炎にのまれていったという。

ルフォールは、以前読んだ書物で似たような物があったのを思い出した。題名は「炎の街」。作者は……不明だ。この本は、紅蓮戦争の様子が克明に記されている。唯一、戦争の悲壮さを伝える内容のものだ。その中で、このような記述があった。

――逃げ惑う人々をあざ笑うかのように、火は人を飲み込む。男も女も子供も老人も。一瞬で灰にしつくすのだから、包まれたものはきっとまだ自分は逃げていると思っているだろう。私は、高い丘の上から町を見下ろした。

そこには、炎で焼かれる街がある。巨大な炎は、暖炉のように暖かく、残酷に赤い。

笑い声がする。いや、泣き声か？

声は空の方から降ってきた。

声のする方には、人がいる。空に浮いている――

記述はここで終わっているが、ラカンの夢はそれに非常に酷似している。本に書いてあるままを暗記してしゃべっているようだ。だが、本の文章より彼女の夢の方がより現実味があるのは確かだ。ルフォールは彼女の声に耳を傾けた。

「炎の中を進んでいくと、笑い声がしたの。……いいえ、泣き声だった。声は空から聞こえたわ。空を見ると、そこには私がいた。もう一人の私……」

ラカンの視線が遠くなる。その様子は、ルフォールには彼女がまだ夢の中をさまよっているように見えた。たどたどしくも話し続ける彼女は、気丈に見えるが今にも泣いてしまいそうだ。組んでいた両手はいつの間にか離れ、ベッドのシーツを強く握り締めていた。

「気がついたら、私は彼女のそばにいたわ。……彼女って呼ぶのはおかしいけど。思い切って私、聞いてみたの。どうしたの？って。そしたら、彼女は泣いているのか笑っているのか分からないような顔で言ったわ。全て壊すって……」

ルフォールはゴクリとつばを飲み込んだ。気がつけば、手には汗が握られている。怖いのだろうか。だが、彼女から視線を外すことはできない。

彼女が戦っているからだ。

「何故そんなことをするの？　って聞いたら、彼女は、そうしないと、みんな私から離れていくって言うの。孤独が怖いんだわ。誰にも理解してもらえずに、目の前にあるもの全てを壊そうとしている。私は彼女を止めようとした。だけど、彼女は壊すことを止めようとはしない。だから……」

そこで、ラカンはうっすらと微笑みを浮かべた。

「抱きしめたの。そうしたら、彼女も抱きしめてくれた」

その微笑みは、まるで女神のように穏やかだった。彼女のこんな笑い顔を見たのは、恐らくルフォールが初めてだろう。これが、彼女の本質かどうかは分からないが……

ルフォールは尋ねた。
「それで、どうなったんだい？」
「彼女ね、寂しかったの。すぐに分かった。彼女は私だった。私の暗い部分が、絶対なる破壊者としての彼女になっているの。でも、それを私は認めようとはしなかった。拒否してきた。だけど、いつまでもそうしていられない。もう一人の私は、私以上に孤独と罪に苦しんでいた。だから、もう開放してあげようと思って……」
彼女はそこで一呼吸おいた。
「彼女と一緒になったの」
二つの心が一つになる。それは、ある意味兵器として完成したのではなく、一人の人格者。人として、完成したということだろう。今、ラカンは過去の自分と融合することによって一人の固体となったのだ。千年という長い時間をかけて彼女は、自分探しの旅を終えたのだ。彼女の言葉が、ルフォールにはそう聞こえた。
ラカンは言った。
「聞いて、ルフォール。今更かもしれないけど、千年前の紅蓮戦争。あれの発端は、間違いなく私なの。でも、それには理由があるわ」
驚愕の事実だ。このオーバー・アイルを取り囲む謎が、彼女の一言で明らかになった。紅蓮戦争の発端。それが彼女ではあるだろうと考えられてきたが、それが今、事実となった。しかし、ルフォールは単純に喜べない。理由があるというのだ。いつになく厳しい視線を向けるラカンに、ルフォールは一瞬戸惑ったが彼女は関係なく話しを進めた。
「全ては、あのカルバンが関係しているの」
「……カルバン！」
彼女は話してくれた。
カルバンは、千年前に現れた『全ての災厄』と彼女は言う。
あらゆるものを憎み、あらゆるものを破壊し、この星に生きる全ての生命を抹消して、全てを無に帰す存在。
その力は絶大で、彼女はもてる力を解放して立ち向かったが、歯

が立たなかったそうだ。それでも彼女は戦った。だが、何度も戦っているうちに、あることに気がついたのだ。彼との戦いの後は、必ず全てが破壊されている。

街も、国も、島も！

彼女は悩んだ。カルバンと戦えば、自分も全てを破壊してしまう。だが、戦わなければこの星そのものが彼に破壊されてしまう。しかし、カルバンは待ってはくれない。今日もどこかで暴れていると分かれば行かなければならない。彼女は次第に麻痺していった。いや、麻痺ではなかった。カルバンと戦うことによって生じる破壊を見て喜んでいる。

破壊することに快感を覚えていったのだ。

いつしか、彼女の中に彼女はいなかった。いるのは、絶対なる破壊者としての対なる存在。その存在のみが彼女を突き動かしていた。彼女は心の片隅で「止めて！！」と叫ぶしかできなかったという。

「壊すだけ壊した後は、何もなかったわ。あるのは、瓦礫にたたずむ私とカルバン。お互い、戦いすぎて疲れきっていたわ。力を出し尽くしたのね。これが最後の一撃になる……そう思ってしかけたら、妹に止められてね。そのまま意識を失ったの。気がついたらあの島に横たわっていた。そばにはアルケードがいたわ。彼には悪いことしちゃった……」

「そうやって、千年間、君を見守ってきたんだね」

そう言って、ルフォールはふと浮かんだ疑問を彼女に投げかけた。

「君には妹がいるんだ？　今は、どこでどうしてるのかな？」

彼女は首を横に振った。

「分からない。あれから千年……一度も会ってないわ。むしろ、もう生きてはいないかも」

「そうか……」

なぜかルフォールはうなだれた。ラカンの話しを聞いて疲れてしまったのか？　いや、そうじゃない。彼女はあの戦争の後、千年も戦ってきていた。それと比べたら、自分などなんとちっぽけな存在

だろう。今自分にできることとはなんだ？　自問自答を繰り返すうちに、ルフォールは立ち上がった。
「ルフォール？」
ラカンを見るルフォールのまなざしは、鋭かった。何か決心をしたのか、今までよりも強い決意が伺える。
「ラカン。僕は決めたよ。僕は全てを失ってしまった。だけど、僕にだってやるべきことがある！」
そういう彼の声はいつになく強い。
「君はここで休んでてくれ。君は十分戦ってきた。もう戦う必要はないんだ。後は僕たちに任せて。この国は……いや、このオーバー・アイルは僕たちのものなんだ。カルバンなんかに破壊されてたまるか！　ラカン、今度は僕たちが戦うよ！　君に甘えてばかりいられない！　僕がこの国を守る！」
そう言うと、ルフォールは椅子を蹴り上げて部屋を飛び出してしまった。向かう先は、ロイドたちがいる作戦会議室だ。ルフォールは走りながら自分の中にふつふつと沸き起こるものを感じていた。それは王族としての使命でも、プライドでもない。義務だ。自分が先頭に立ってこの国を守るという義務感だ。
やるしかない！
そう言い聞かせて、彼は全力で廊下を駆け抜けていく。

一人部屋に残されたラカンは、ベッドの上でルフォールが飛び出していったドアを見つめていたが、やがてベッドから降りると静かにつぶやいた。
「ありがとう、ルフォール。でもね……」
そう言うと、彼女の周りを金色の風が舞い始めた。彼女は窓の外を見つめた。窓から差し込む朝日が、彼女の顔を照らしている。
「行かなければならないの……」
そう言うと、彼女は部屋から姿を消した。

第十六章　決意

ルフォールは、勇み足で……いや、ほとんど駆け足で廊下を進んでいる。

曲がりくねった廊下を駆け抜け、時には往来する人にぶつかりそうにもなるが、その足が止まることはない。

向かう先は、『獅子の翼』の作戦指令室。

ルフォールは、高鳴る鼓動を抑えることができなかった。口を開けば、すべてがこぼれだしそうだからだ。ぐっと口を結び、ひたすら目指す部屋のドアを追いかけている。

見えた……！

わずかな光がこぼれるドアがある。中からは、数人の話し声が聞こえていた。実際は聞こえていないのかもしれないが、ルフォールの耳には中の声が届いているようだ。ルフォールは、勢いを止めることなくドアを、バン！　と開けた。部屋の中の数人の視線が、ルフォールに移される。そのどれもが、驚きと疑いに満ちていた。が、ルフォールはそれには目もくれず、今にも噴出しそうになりながら押さえていた口を、やっと開くことができた。

「僕を…僕を義勇軍に加えてください！」

その口からこぼれた言葉に、その場にいたものは全員耳を疑った。皆がどよめく。

元王子が戦う？

そんな華奢な体で何ができる？

死に急ぎたいのか……？

数々の罵声が飛ぶ中、ルフォールは切らしていた息を整える間も

なく叫んでいた。
「僕だってこの国の民の一人なんです！　国を……エイブラを愛する気持ちは同じなんです！」
その言葉に、部屋を埋め尽くしていたどよめきは少しずつ消えていった。
「確かに、王家は皆を苦しめました！　悪行の限りを尽くしました！　僕もその王家の一人だけど、何かしたいんです！　あんな……カルバンみたいな人間にされるがままなんて嫌なんだ！！」
ルフォールは、こぶしを硬く握り締める。皆は気付かないが、その手は怒りか、悲しみか……
震えている。
「僕もこの国を守りたいんだ！！」
そこまで言うと、部屋は静まり返っていた。ルフォールはそのことに気付かず、我に返るまでしばらくかかったが、彼本人にしてみればほんの数分が何時間にも感じた。静まり返った部屋には、ルフォールの切れた呼吸音だけが漂う。
皆の視線がルフォールに突き刺さる。
ロイドは、厳しい視線を彼に送りながら静かに口を開いた。
「……なりませぬ」
その言葉には、とてつもない重さがあった。ルフォールの心は、その重みに耐え切れず、今にも押し倒されてしまいそうだ。
「坊ちゃん、もし坊ちゃんが居なくなったら、エイブラはどうなります？」
その言葉に、ルフォールはゴクリと唾を飲み込んだ。体に浮かんだ汗がじっとりとルフォールを包み込んでいく。
「あなたは、残された最後の王なのです。ここは我々に任せて、今はゆっくりお休みくだされ」
ロイドはルフォールの気持ちを逆撫でしないよう、やんわりとした口調で諭すように語り掛けるが、その気遣いが逆にルフォールの気持ちをいらだたせた。ルフォールの顔色が曇る。その様子は、自

分が国のために何もできない歯がゆさと、自分を子ども扱いするロイドに対する怒りが溢れているように思える。

なぜ、誰も僕の気持ちを分かってくれない？
なぜ僕も一緒に戦わせてくれない？
なぜ僕ばかり特別扱いする？

なぜ……なぜ……

「なぜ……！！」
最後のほうは言葉にならなかった。叫びながらルフォールは床にかがみこんでいた。怒りのあまり拳は硬く握られ、床に何度もたたき付ける。肩は震え、奥歯をぎゅっとかみ締め、気を許すと今にも何かが爆発しそうだった。部屋の中には、ルフォールが床に拳をたたき付ける音と、それを黙って見ている視線だけが共存している。誰も彼を止めることはできなかった。彼もまた、自分を止めることができなかった。
次第に手の感覚は薄れ、床にたたき付けられる部分には血が滲み出す。だが、ルフォールはそんなことにはお構いなしのように続けていた。ルフォールの怒りの暴走は誰にも止めることができない。誰もがそう思っていたが……
「王子様、もう止めな」
そう声をかけ、ルフォールの掲げた腕を握る者がいた。その力は強く、だが暖かい。ルフォールが顔を上げると、そこには穏やかだが猛々しい顔つきを持った男がいた。それをみたロイドはそっと名を呼んだ。
「フリンク……」
フリンクは、そっとルフォールの手を離すと、立ち上がってロイドに向き直った。その顔つきは、少しながら彼なりの怒りのようなものが含まれる。

「なぁ、ロイド爺。王子様を入れてやってもいいんじゃねぇか。こうやって、頼んでんだ。生半可な気持ちでここに居るわけじゃねぇと、俺は思うぜ」
その言葉にロイドが食って掛かった。
「しかしな！　このお方はエイブラを背負われるかたじゃ！　もし戦に出向かれて何かあったらどうする？」
「そん時はそん時だ！！」
フリンクの大声に皆がひるんだ。フリンクの瞳の中には怒りの炎がゆらめき、その眼で皆を睨み付けている。
「いいか？　今は王族だ何だって言ってる場合じゃなぇ！　国の一大事なんだ！　そんな時に死なせるわけにはいかねぇとか、戦には出さねぇとか……子供の喧嘩じゃねぇんだ！　国がなくなりゃ皆死んじまったのと同じだ。そうだろ！？」
フリンクの問いかけに、皆黙ったままだ。しかし、フリンクはお構いなしに続ける。
「今は一人でも手がほしい時なんだ。例え王族でも自分から名乗りを上げてんだ、ありがたいじゃねぇか。違うか？　ロイド爺？」
そう言われたが、ロイドは黙ったままだ。
フリンクはふぅっと深呼吸した。この男でも少々は緊張したようだ。意外な一面を間近に見て、ルフォールは少し安心した。先ほどの様子では鬼のような男だったが、今こうして見ると、心強い。
「仕方あるまいな……」
ロイドが口を開いた。
「坊ちゃんは先代に似て、一度言い出したら聞かぬお方。突き放したところで、お一人で行ってしまわれるでしょう。そうなっては一大事。それならば、わしの目の届くところにいらっしゃってもらわなければ、安心できませぬ」
そう言うと、ルフォールに向き直った。
「坊ちゃん、遊びではありませぬ。この国の行く末、しかと見届けなさってくだされ。我らが『獅子の翼』命果てるまであなた様をお

守りしましょうぞ」
　ロイドにそう言われ、ルフォールはうなづいた。重い……だが、うれしい言葉だった。これで一緒に戦える。皆の邪魔にならぬよう努めよう……そう心に言い聞かせた。
　ルフォールが安堵したのを見て、フリンクは立ち上がった。ルフォールは見逃さず声をかけた。
「フリンクさん……あの……」
「礼はいらねぇ」
　フリンクは振り向かず答えた。
「まだあんたを認めたわけじゃねぇ。だが、今はさっきも言ったとおり猫の手を借りても足りねぇくらい忙しいんだ。あんたの細腕じゃ剣すら持てねぇだろうが、いないよりはいい。せいぜい死なねぇように頑張ってくれ」
　それだけ言うと、フリンクは人を掻き分けて奥へと消えていった。
　その姿を見届けると、ルフォールは無言で頭を下げた。口は悪いが、フリンクの優しさが伝わった気がする。
　ルフォールはそう思っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3602d/

オーヴァー・アイル　The　Ｒｏｓｉｒｅ

2010年10月13日13時32分発行